成島柳北『伊都満底草』評釈稿（二）

高橋昭男

伊都満底草巻之二

① 六月某日、桂晴蓑福縮衣唐華陽等、會二于誰園之荷花池上一、妓阿鳥有レ約不レ來、有二小藤者一至、其醜似レ猴、又似レ蟾、坐客皆不レ懂、因題二一絶一　晴蓑作畫于縮衣氏之扇

六月某日、桂晴蓑・福縮衣・唐華陽等、誰園の荷花池のほとりに会す。妓阿鳥は約有りて来らず。小藤なる者有て至る。その醜たるや猴に似、又、蟾に似たり。坐客皆懌ばず。因つて一絶を題す。晴蓑、画を縮衣氏の扇に作す。

三鞭美酒幾杯傾　　武昌喫霞仙史
談レ志開レ襟到二二更一　　志を談じ　襟を開きて　二更に到る
只是今宵有二遺憾一　　只是れ　今宵　遺憾有り
不レ聽二鳥語一聽二蛙聲一　　鳥語を聴かず　蛙声を聴く

三鞭の美酒　幾杯か傾く

語注　○桂晴蓑＝桂川甫周のこと。○福縮衣＝福沢諭吉のこと。縮衣は福沢が若い頃使った号子囲の宛字。縮衣は墨染めの衣の意であるから、真面目で、座の酔狂から距離を保っていた福沢への春三らしい当てこすりであろう。○唐華陽＝神田孝平のこと。「からかよふ」で、（神田）から通ふ、の意。③語注参照。○蟾＝ひきがえる。○懌＝よろこぶ。たのしむ。○武昌喫霞仙史＝ぶしょうきっかせんし。（何々）節を聞かしゃんせ、の宛字。柳河春三のこと。○三鞭美酒＝シャンパンのこと。○二更＝午後十時。○鳥語＝お鳥の声を指す。○蛙声＝お藤の声。

評釈　春三の前書には、「（『伊都満底草』が）余ガ青年ノ比柳春三桂月池等ノ人々ト会飲スル毎ニ各筆トリテ見聞キシコトヲ書キタル反故」（『花月新誌』十七号）という柳北の証言そのままの会合の様子が描かれている。柳春三は柳河春三、月池は桂川甫周の号である。おそらく滅多に顔を出さなかったであろう福沢諭吉が参席している

のも興味深く、陪席する芸妓の名も具体的である。列席する洋学者たちと、彼女たちの親密な関係もほの見えて、柳北邸のサロンの自由闊達な雰囲気がうかがえる。マドンナのお鳥が来られず、当て馬の小藤がとんでもない醜女で、連中が落胆しているところを、春三はたくみに七言絶句に仕立てると、すかさず甫周が福沢の扇子に絵を入れて、その絶句を賛とした。絵柄には猿と蛙が描かれた（③参照）。俗の世界に遊ぶ風流韻事の楽しげな光景である。

② 代二妓小藤一解レ嘲　妓小藤に代りて嘲を解く

誰園主人

諸君呼レ妾作二獼猴一　諸君　妾を呼ぶに　獼猴と作す
妾面肖レ猴何足レ憂　妾の面　猴に肖れども　何ぞ憂ふるに足らん
請看堂々君子國　請ふ看よ　堂々の君子国
猴而冠者不二曾羞一　猴にして冠する者　曽て羞ぢざるを

語注　○獼猴＝さる。大ざる。○君子国＝日本をいう。○猴而冠者＝豊臣秀吉は猿面で、「猿面冠者」とあだ名をつけられた。

評釈　①の春三の戯画的絶句を、柳北はあざやかな諧謔をもって引っくり返す。芸妓はいわば当時としては低い身分の女性であるが、遊びの場においては、客は彼女らを決して粗略には扱わない。それが嗜みというものである。ふだんの宴席で、小藤は笑いのタネにされていたであろう。この席においてもそうであったかも知れないが、小藤とて先刻承知で、春三の巫山戯に笑みを浮かべながら、軽くやり過ごしたであろう。その笑いの中に柳北は、一抹の悲哀を感じたのかも知れず、あろうことか太閤秀吉を引っ張り出して、小藤をこの場のヒロインに祭りあげ、いたわってみせたのである。

③ 晴蓑漁隠の筆なる猴と蛙かきたる扇にかきつけける

河淮經略姑蘇監田唐通

此夜盛會。衆惜二福郎之歸一。強留不レ可而去矣。邦音歸與蛙通去與猴通

此の夜、盛会なり。衆、福郎の帰るを惜しむ。強て留るも可ならずして去る。邦音、帰（かえる）は蛙と通じ、去（さる）は猴と通ず。

語注　○河淮經略姑蘇監田唐通＝神田孝平のこと。かわいけりゃこそかんだからかよふ（可愛いけりゃこそ神田から通ふ）。

評釈　こうなると、孝平も黙っていない。福沢の扇面に甫周が描いた猿と蛙の絵に、こう書き付ける。蛙の絵の脇に「残念ながら福沢さん帰る（蛙）」、猿の絵の脇に「引き留めたが去る（猿）」と。これで列席者一同大笑いとなったに違いない。①②③によって、慶応元年六月のある日の柳北邸における詩文の応酬の具体的な有様が、手

に取るように見えてくるのである。そこには、詩文の教養を身につけ、花柳の巷での遊びの場数を踏んだ面々による、風流韻事の極みがあるように思う。しかも彼らが洋学という時代の先端を行く学問を学ぶ者たちであったところに、興味を感じずにはいられない。

④ 偶書以示二席上一　偶ま書して以て席上に示す　風車生

一陣頑雲遮レ月夜　一陣の頑雲　月を遮るの夜
半簾急雨砕レ花朝　半簾の急雨　花を砕くの朝

語注 ○風車生＝不明。○一陣＝隊列。○頑雲＝じっと動かない雲。○半簾＝半分おろした簾。

⑤　星槎

誰か園歟あるじは問はず梅の花

語注 ○星槎＝甫周のこと。

評釈 誰が園か、という以上、主は誰園である柳北である。菅原道真の「こち吹かば匂いおこせよ梅の花あるじなしとて春を忘るな」（『拾遺和歌集』巻十六）を踏まえている。

⑥ 乙丑五月紀事聯句　乙丑五月の紀事、聯句

四分五裂八笑舘笑原作松　四分五裂す　八笑舘笑はもと松に作る
七顚八倒六窮生唐通　七転八倒す　六窮生唐通
秋水一去二百里　秋水　一たび去ること　二百里
阿金雙涙三千行仙客　阿金の双涙　三千行仙客

語注 ○乙丑五月＝慶応元年（一八六五）五月。○聯句＝二句目と四句目の小文字が作者であろう。唐通は神田孝平。仙客は柳河春三。○八笑舘＝江戸の遊び好きの閑人仲間八人が、四季の遊楽に演じる茶番とその失敗による滑稽をえがいた滑稽本の代表作である『花暦八笑人』を踏まえている。「笑はもともと松で表記されていた」という注がある舘は柳北邸であろう。○六窮生＝六人の貧書生。集まっていたのは六人とは限らないが、七転八倒との語呂合わせであろう。○秋水一去二百里＝秋水は宇都宮三郎のこと。慶応元年五月に幕府が行なった第二次長州征討に、宇都宮が随行したこと。『史記』荊軻伝の「風蕭蕭兮易水寒　壮士一去復不還」をもじっている。○阿金＝おかね。宇都宮の愛人であろう。○双涙＝両目から出る涙。○三千行＝李白「秋浦歌」の「白髪三千丈」を意識する。

評釈 六人の貧書生が、八笑人そのままに、めいめい勝手なことを言い合い、駄洒落を飛ばして笑い転げる。一句目が四、五、八、二

句目が七、八、六と数字を並べて戯れる。そんな柳北邸に集まるメンバーの一人、宇都宮三郎が第二次長州征討に従軍して行くことになり、愛人のお金の頬には三千行の涙が落ちたということ。一去、二百里、三千行と一、二、三の語呂合わせ。

⑦　人のもとへ消息のはしに　有註　　春影

とぶ鳥‖の跡を慕ひて登りけん雲の上こそみまく欲しけれ

語注　○春影＝柳河春三。○有註＝「註有り」という注記であろうが、その「註」は見当たらない。○鳥＝芸妓お鳥。

⑧　だいしらず　　寝覚早樹

あし垣のよそに隔つる恨だに梅‖が香おくる風に忘れつ

節毎に千代を籠たる竹‖の子は幾代へぬべき心なるらん

語注　○寝覚早樹＝甫周。○あし垣の＝芦垣が、内と外とを隔てるところから、「よそ」に掛かる。○梅＝芸妓お梅。○節毎に＝節は「よ」とも訓めるので、夜毎にかかるか。○竹＝芸妓お竹。

⑨　寝覚早樹のもとへ消息にそへて　　歩柳

夕河岸にひる飯を喰ふ朝寐坊

語注　○歩柳＝蒲柳（ほりゅう）に通ずるとすれば、蒲柳の質であった柳北か。

評釈　この河岸は柳橋あたりの船宿が並ぶ神田川の河岸か。前夜から泊まり込んだ船宿で朝寝坊をしてしまった遊客を詠んだ句。蒲柳は第一義が川柳（かわやなぎ）の意であるので、歩柳とは、なよなよ、ふらふらと花柳界に遊ぶ嫖客に自らをなぞらえているのかも知れない。

⑩　題しらず　　唯好

思ひ出て戀しき時は閨（ねや）のうちに君が玉章（たまづさ）巻かへし見る

語注

○唯好＝柳北。○玉璋＝手紙。

評釈　この歌は柳北の作であるが、「随身巻子」五十九表に次のような記載がある。

清和念一日

題しらず

おもひで、恋しき時は
手枕のゆめをたのみて
まどろみにけり

これは甫周の作であろう。⑥の作が「乙丑五月紀事聯句」とあるので、⑩の柳北の和歌は、慶応元年五月か遅くとも六月に作られたものと推定できるが、「随身巻子」の記事は、翌年の慶応二年四月二十一日に書かれていることが明確である。因みに清和は陰暦四月を意味する。すなわち、柳北の和歌が先に作られ、これに似たような内容の甫周の和歌は、柳北作をすでに知っていた上で詠まれたようである。恋人のことを思っているのは、男か女か。どちらとも取れるが、やはり女が男を思って、恋文を手にとったり、夢に見ようとする方が恋歌としてはふさわしい。歌謡曲などでも、たとえ男の歌手が歌っていても、大半は女の気持をあらわしている場合が多い。

⑪　小　連

きのふ見て又けふ見たしうめの花

語注　○小連＝柳北。

評釈　梅といえば、宋の詩人林逋（りんぽ）である。そのひそみに倣って梅好きの柳北が自らを小連とし、梅への思い入れを吐露する句である。

⑫　よみ人不知

藝者をおくりて歸るさによめる

玉くしげはこ屋のみこそわびしけれ
いつかは妹とふたりねぬべき

語注
○よみ人不知＝春三。○玉くしげ＝くしげは櫛笥（くしげ）で、美しい箱。箱屋に掛かる。

評釈　箱屋を藐姑射（はこや）と置き換えて自らの号とした春三であるから、この歌は、春三作であろう。三味線箱の運びから、芸妓の身の回りのことまでを仕事とするのが箱屋であるが、かしずく芸妓との男女の関係は御法度とされていた。

⑬　繁華女史

歐羅巴へ行ける人のもとへ

もゆるおもひが蒸氣となりて走りつきたや巴勒（ハリス）まで

語注　○歐羅巴へ行ける人＝水品楽太郎をさす（『桂川の人々』四五八頁）。○繁華女史＝巻之一㊵の濯娘にあたるが、本当の作者は仲間

内の誰かであろう。○巴勒＝パリ。

評釈　慶応元年閏五月、水品楽太郎は外国奉行柴田貞太郎に随行して欧州へ行った。このときは、水品の二度目の外遊である。用向きは、造船所の設立、兵制の改革、海軍技師並びに陸軍士官の派遣につき、フランス政府との交渉役としてであった。フランスから陸軍士官が派遣されたのは慶応三年で、すでに新式のフランス式三兵伝習に従事していた柳北が、その指揮下に入ることになる。

⑭　晴蓑ぬしのもとへ　　仙客

はぢかれるのを常とは知れどつい小あたりも心から
待てといふなら五年はおろか
コンキずくならまけはせぬ

語注　○晴蓑＝甫周のこと。○常＝芸妓の名。○小あたり＝相手の気持をそれとなく引いてみること。○コンキ＝根気。

評釈　甫周に贈った春三の都々逸。こんなのが出来たけど、どんなもんだろう、というようなニュアンスで贈答が行なわれたのであろう。ただちに甫周は⑮を返す。

⑮　返しに　　晴蓑

まよふ心で考へ見ればつねの心がわからない
待てといふなら待つても見やう金とコンキの盡るまで

評釈　甫周の返しは、ややマジメか。こういうくだけた俗謡は春三の方が、一枚上のようである。

⑯　贈二多喜兒一　　賢甫老生

欲張根性未二全休一　欲張り根性　未だ全くは休まず
再使二歐州一亦御尤　再び欧州に使いするも亦た御尤も
佛都買二得珊瑚一日　仏都　珊瑚を買得たるの日
思二出柳橋藝者一不　柳橋芸者を思ひ出すや　不や
歐州作西洋、佛都作巴勒、如何
欧州は西洋に作り、仏都は巴勒に作るは如何

語注　○多喜児＝水品楽太郎のこと。○賢甫老生＝甫字のあることで甫周か。

評釈　巻之一の㊴㊵の七言絶句と関連する。小文字の欧州作云々は柳北の註。パリの水品楽太郎よりの甫周宛書簡に対する返信に、記

された狂詩であろう。欲張り根性とは、パリからの来信にヌケヌケと女の動向を尋ねた楽太郎への当てつけであろう。花の都で土産の珊瑚でも買って、女の事に思いをめぐらしているのでしょうよ、とからかい気味である。

⑰　題しらず

心あらば仇にはうけじ露霜のかゝる情ににほふ梅が香　晴蓑

語注　○仇＝本来は徒。一時的でかりそめなさま。いいかげんでおろそかなさま。○うけじ＝受けじ。○梅＝芸妓のお梅にかかる。

⑱　寄二多喜子一　多喜子に寄す　小湖山人

海上長風檣幟斜　海上　長風　檣幟斜なり
秋來定覺客愁加　秋来　定て覚ゆ　客愁の加はるを
數千里外巴黎月　数千里外　巴黎（パリ）の月
遙照翠楊橋畔家　遥かに照す　翠楊橋畔の家

語注　○多喜子＝水品楽太郎。○小湖山人＝箕作秋坪。理由は⑲に後出。○長風＝遙か彼方から吹く風。○檣幟＝帆柱。○翠楊橋畔家＝翠楊橋は柳橋の漢語表記。柳橋の畔にある愛する女が居る家。

評釈　水品楽太郎のパリからの便りを見て、箕作秋坪が詠んだ七言絶句。旅愁こらえがたきパリで見ている同じ月が、日本では柳橋にある水品の女の家を照らしているという意味。

⑲　解二嘲詩、似二多喜子一　嘲りを解く詩、多喜子に似（しめ）す　仝

挑燈每晚照二軒々一　挑燈　毎晩　軒々を照らす
不レ見色男通二石垣一　見ずや　色男の石垣に通ふを
莫レ道連中盡無レ慟　道（い）ふなかれ　連中尽く慟（なげ）くこと無きを
一同當惑近二中元一　一同当惑す　中元に近きを

語注　○解嘲＝人の嘲りを弁解する。○似＝示す。○仝＝同じく。○挑燈＝提灯であるが、パリの街の灯りか。○石垣＝パリの石垣とすれば、色男はパリジャンの遊冶郎か。○慟＝なげく。○中元＝陰暦七月十五日。

評釈　小湖山人が楽太郎に成り代わって弁明の詩を詠んでいる。楽太郎がパリで詠んだという設定だとすると、小湖山人はパリを知っている人物である。そこで柳北周辺の人物で、この時点でパリを知っているのは、文久元年の遣欧使節団の一員であった福沢諭吉と箕作秋坪である。福沢は、こういう遊びには、一歩距離をおいていたから、

福沢ではないであろう。したがって、小湖山人は箕作秋坪であるとみてよいのではないか。ちなみに楽太郎も使節団の一員であったから、気心が知れているのである。してみると、⑱の詩も、海外渡航の経験が反映されているように見えてくる。たとえば、海上長風などという表現は、船上に居て来る日も来る日も大海原を眺めた経験があるからこそのものであろう。

⑳　花押説　　喫霞仙客

仙客嘗贈二書于誰園先生一。書有二花押一。字體模糊難レ辨。先生訝焉。仙客爲二之説一曰。僕之花押。即臥孟Good man二字也。臥孟者英語。漢譯爲二好人物一。蓋処以自別二于世之惡漢一也。僕嘗認二先生之花押一。爲西彼皮三字、〆。按西爲二酒孛玉蛾之略一。彼爲二彼獨于飛之略一。皮爲二啡啉梅花之略一。是占二三美一之義明矣。又鑒二晴蓑漁隱之花押一。實爲二桂彼彼三字一。桂其自稱耳。彼囓二哺新竹也。又彼獨于飛也。則得レ隴而望レ蜀之意亦明矣。先生擅占二三美一。漁隱得レ隴望レ蜀。皆非二惡漢一而何。仙客獨無二此事一。是所二以押一臥孟之字一也。先生察レ諸。

旃蒙赤奮若夏六月

花押の説

仙客、嘗て書を誰園先生に贈る。書に花押有るも、字体模糊として弁じ難し。先生訝る。仙客、之が説を為りて曰ふ。僕の花押は、即ち臥孟Good man二字なり。臥孟は英語なり。漢訳すれば好人物と為る。蓋し自ら世の悪漢とは別なる所以なり。僕嘗て先生の花押を認む。西彼皮の三字に為る、〆。按ずるに西は酒孛玉蛾の略と為す。彼は彼独于飛の略と為す。皮は啡啉梅花の略と為す。是れ三美を占るの義、明かなり。又、晴蓑漁隠の花押を鑑るに、実に桂彼彼三字に為る。桂は其れ自称なるのみ。彼は囓哺新竹なり。又、彼独于飛なり。則ち隴を得て蜀を望むの意も亦た明かなり。先生は擅に三美を占め、漁隠は隴を得て蜀を望む。皆、悪漢に非ずして何ぞや。仙客独り此の事無し。是れ臥孟の字を押す所以なり。先生、其れ諸れを察せよ。

旃蒙赤奮若夏六月

語注　○花押＝草書体の署名をさらに崩して図案化したもの。○臥孟＝臥には漢音、呉音ともにグゥの音があり、孟には呉音にマンの音がある。したがってグードメンである。○悪漢＝『伊都満底草』にはよく使われるが、あくまで仲間内でのシャレのめした言い方で、いわゆる「ワル」といったニュアンス。○酒孛＝シェープルとルビがあるが、意味不明。「石橋政方の『英語箋』に見えていることばである。おそらくこの『英語箋』は、柳北邸の英語学習会で使われたテキストのひとつであったにちがいない」（前田愛『成島柳北』）。○于飛＝夫婦の仲のむつまじいたとえ。鳳凰が仲良く飛ぶの意にもと

づく。○三美＝玉蛾、于飛、梅花を指し、柳北お気に入りのお蝶、お鳥、お梅の三人の芸妓のこと。○晴蓑漁隠＝桂川甫周。○得隴望蜀＝隴（甘粛）を平らげて、さらに蜀を攻め取りたい思う。人の欲望の限りないこと。甫周が新竹（お竹）、于飛（お鳥）の二人に思いを寄せていること。○旃蒙＝乙（きのと）の歳。赤奮若＝丑歳の異称。乙丑夏の六月、ということ。

評釈　柳北邸の洋学者サロンの中心が、柳北、甫周、春三であり、その関係がいかに親密であったかを裏付ける戯文である。柳北、甫周の二人とも、自らの花押に馴染みの芸妓の名を織り込んでいて、グッドマンたる春三としては、ここに二人の悪漢を弾劾せずにはいられない、といった趣の戯文である。お蝶はこの時点ですでに柳北の側室となっている。柳北・甫周の二人とも、お鳥を織り込んでいるのが面白い。客と芸妓の関係は、花柳の地においては本来、厳しい掟があって、客同士のさや当てを未然に防ぐルールがあったが、柳北邸や甫周邸のような、こうしたサロンにおいては、実にフレキシブルで、一人の芸妓を二人の客が愛することも、いわばゲームを楽しむ感覚であったと思えばよいのである。三人のうち、甫周がもっとも美男子で、柳北は顔が長すぎるのが難点であるが、貴公子然としていた。それに引き替え、春三は相当な醜男であった。「（柳河春三さんはとてもおもしろい人で）、第一容貌も一見人がふき出さずにはいられないようでした」（今泉みね『名ごりの夢』三頁）。したがって、お前たち二人にはかなわないが、オレはあくまで人品骨柄で勝負するのだよ、といった趣が見えなくもない。

㉑　書喫霞仙客花押説後　　誰園漫士

余頃日閲二仙客之書一。末有二花押一。譯レ之曰二好人物一。竊謂仙客非二世之所謂好人物者一。此押恐係二別人之記一焉。質二之社友一。皆曰然。質二之佳人一。亦曰然。於レ是書以問二仙客一。既而獲二仙客所レ著花押説一篇一。讀レ之宿疑氷解。且得仙客爲二眞悪漢一之證レ也。蓋好人物即吉人也。吉人、住田坊仙客某舎一號二喫霞一。喫與レ吉通。亦可レ證也。且篇中解二西字一爲二酒孛（シャーブル）之略一。實爲二謬解一。不知西即雲（シー）之略。蓋閑雲流水與レ世相遺之意也。若二彼（ビー）與レ皮（ピー）亦即書冊詩學（Book Poetry）之略。皆係二文雅之事一矣。而仙客以レ余爲二桂晴蓑同臭味者一。豈不レ冤哉。雖レ然盗常疑レ人以爲レ盗。則若二仙客之説一亦自表二其爲二悪漢一耳。於レ余何有レ所レ損乎。何有レ所レ損乎。

仙客再評曰。是遁辭耳。且古羅得（クロード）之事。固屬二曖昧一。與レ攫レ雲相似。仙客判爲二酒孛（シャーブル）一者。竊爲二先生一諱二其悪一也。先生不レ知。自聲二其罪一。亦爲レ可レ笑。

喫霞仙客が花押の説の後に書す

余、頃日（けいじつ）、仙客の書を閲するに、末に花押有り。之を訳して好人物と曰ふ。竊（ひそ）かに謂ふ、仙客は世の所謂（いはゆる）好人物なる者には非ず。

此の押は、恐くは別人の記に係らん。之を社友に質せば、皆然りと曰ふ。之を佳人に質せば、亦た然りと曰ふ。是に於て書して以て仙客に問ふに、既にして仙客著す所の花押の説一篇を獲たり。之を読みて、宿疑氷解し、且つ仙客の真悪漢たるの證を得るなり。蓋し好人物とは即ち吉人なり。（吉人とは住田坊の仙客の某舎）一に喫霞と号す。喫は吉と通ずるも亦た證とすべきなり。且つ篇中に西字を解して酒孛の略と為すは、実に謬解たり。知らずや、西とは即ち雲の略にして、蓋し閑雲流水の世と相遺するの意なり。彼と皮のごときも亦た、即ち書冊詩学の略にして、皆、文雅の事に係るなり。而るに仙客、余を以て桂晴蓑と同臭味の者と為すは、豈に冤ならずや。然りと雖も盗は常に人を疑ひて、以て盗と為す。則ち仙客の説の若きも亦た、自ら其の悪漢為ることを表すのみ。余に於ては何ぞ損ずる所有らんや。何ぞ損ずる所有らんや。

仙客再び評して曰ふ。是れ、遁辞なるのみ。且つ古羅得の事、固より曖昧に属す。雲を攫むと相似たり。仙客の判、酒孛と為す。竊に先生と為り、其の悪を諱す。先生知らず。自らそ罪を声す。亦た笑うべしとす。

語注　○社友＝柳北邸に集う仲間内。○佳人＝馴染みの芸妓たち。○吉人＝好い人。立派な人。○住田坊仙客某舎＝住田は墨田か。○桂晴蓑＝桂川甫周。

評釈　春三の花押の説に対する、柳北の反論である。まず春三が自らを好人物とし、柳北を悪漢とするのを、それはあべこべで、春三こそ悪漢ではないかと、論証する（吉人云々の論がいまひとつ不明確）。さらに柳北の花押の西、彼、皮についても、シェープルだとか、芸妓の宛字だとか、勝手なことを言われて迷惑千万だとし、西は雲で閑雲流水、彼と皮は書冊詩学の文雅の辞であるとする。さらに甫周ごときと同臭にされてはたまったものではない。大体、自分のことを棚に上げて、悪漢呼ばわりは片腹痛く、そんな言い草で俺様が傷つくとでも思っているのか、と一喝してみせる、戯れの言葉遊びである。これに対して春三は、そんなの逃げ口上に過ぎない。西がクラウド（雲）なんて、それこそ雲をつかむような話だ。文事にかこつけて、先生ぶるのは「頭隠して尻隠さず」のたぐいで、ちゃんちゃら可笑しい、と意気軒昂である。

㉒　讀花押説　　烏有居士

吾友喫霞仙客押用臥孟二字。某先生譯爲吉人。有説焉。吾竊怪之。蓋仙客好游。粗通柳巷俚語。巷中謂富而使財者曰大尽。曰御客。謂美而漁色者。曰間夫。曰情人。別有一種之客。無大尽御客之財。無間夫情人之色。雖然不書惡法。不言氣障。不起甚輔。是之謂好人物。蓋

得二中庸一之謂也。臥孟之義取二諸於此一。且吉人事。固係二齊諧之談一。與下夫秋後折レ梅。竹外聴レ鳥上。確有二明證一之類上。不レ可二同レ日而談一也。而先生作二此説一。吾竊爲二仙客一憐二其寃一。因不レ得レ不レ辨二一言一。

湖山處士評云。何者狡男子。能草二奇幻之文一。可レ謂二非常之才一矣。

花押の説を読む

吾が友喫霞仙客、臥孟の二字を押用す。某先生訳して吉人と為す。説有り。吾、竊かに之を恠しむ。蓋し仙客は游を好み、粗ぽ柳巷の俚語に通ず。巷中、富みて財を使ふ者を謂ふに、大尽と云ひ、御客と曰ふ。美にして色を漁る者を謂ふに、間夫と曰ひ、情人と曰ふ。別に一種の客有り。大尽・御客の財無く、間夫・情人の色なし。然りと雖も悪法を書さず、気障を言はず、甚輔を起さず、是れ之を好人物と謂ふ。蓋し中庸を得るの謂なり。臥孟の義、諸れを此れに取る。且つ吉人の事は、固より斉諧の談に係る。夫れ秋後に梅を折り、竹外に鳥を聴くは、確かに明證有るの類と日を同じくして談ずべからざるなり。而るに先生、此の説を作す。吾れ竊かに仙客の為に其の寃を憐む。因つて一言を弁ぜざるを得ず。

湖山処士、評して云ふ。何者ぞ狡男子。能く奇幻の文を草す。非常の才と謂ふべきなり。

語注 ○烏有居士＝話の成り行きからすれば、甫周であろうが、春三本人かもしれない。○悪法＝ひどくたちの悪いやりかた。○甚輔＝淫欲の強いこと。嫉妬深いこと。○齊諧＝昔、斉の国で行なわれた怪異談。○秋後＝立秋以後。○秋、梅、竹、鳥＝いずれも柳橋の芸者の名。○湖山処士＝前出の箕作秋坪。○狡男子＝狡猾な男。

評釈 甫周は柳北がグッドメンを吉人としたことに、異論をとなえる。春三は花柳の巷ではなかなかの通人で、札びらを切るでなく、色仕掛けをたくらむでもなく、ありのままに遊んでいるのだが、そういう身の処し方を好人物と評されているから、花押にも用いたのだ。吉人などというのは、他所の国の怪しげな話であって、そんなことと一緒にされたら、春三が気の毒なので、代りに弁護してあげるのだ。この文章に対し、湖山処士の評。何という狡猾な男であろう。尻尾をつかませない破天荒の文章で、類いまれなる才人である。

㉓ 品香評色詩　　香を品し色を評するの詩　　誰園主人

嬌睛一轉坐無人　　嬌睛　一転　坐に人無し
心醉誰尋情味眞　　心醉　誰か尋ねん　情味の真なるを
楊柳莫移栽禁苑　　楊柳　移して禁苑に栽ること莫れ
青々占斷陌頭春　　青々　占断す　陌頭の春

縱使花開愁不レ開　縱使（たとい）　花開くも　愁は開かざらん

不求巧自工　巧を求めずして自ら工なり

語注　○点綴＝小さい雲が点のようにあちこちに浮かんでいる状態。○短墻＝丈の低い垣根。○無復＝決して……しない。○才＝草木の芽。○憐＝愛でる。かわいがる。

評釈　月明かりを受けて、小さな雲があちこちに浮かんでいる。花がようやくほころび始めたのか、一株の梅の木から香りが漂ってくる。私のことを想う人は、ちっとも訪ねてこない。こうして梅の花は開いても、私の愁眉は開かない。

玉釵無レ色曉鬟斜　　玉釵　色無く　曉鬟　斜なり
嬌影幻耶將夢耶　　嬌影は幻なるか　将（は）た夢なるか
借問河源何處是　　借問す　河源は何処か是なる
秋波杳渺漾仙槎　　秋波　杳渺として　仙槎を漾（ただよ）はす

幻夢二字、形容得妙　　幻夢の二字、形容妙を得たり

語注　玉釵＝玉のかんざし。○曉鬟＝寝起きの崩れた髪型。○嬌影＝艶めかしい女の姿。○借問＝質問する。お聞きしますが。○河源＝黄河の源。ここは天の川の源をさすか。○秋波＝美人の澄みきっ

語注　○嬌睛＝色っぽい瞳。○坐＝宴席か。○心酔＝心の底から慕うこと。○禁苑＝宮中の庭園。○占断＝ことごとく占有する。占めつくす。○陌頭＝道ばた。［王昌齢・閨怨詩］「忽見陌頭楊柳色」

評釈　品香評色詩とは、花の香りや色を品評する詩であるが、ここでは女性の色香を品評しているようだ。四首を載せているが、いずれも花を品評する形をとって、それぞれ暗に芸妓の境遇を評したものではないかと思われるが、これまでの作では、「鳥」とか「梅」とか、二重線の傍線を付けて、特定の芸妓を連想させる語が詠み込まれていたが、この四首には、それらがない。となると、作者が柳北と判然している以上、側室にした「お蝶」を詠ったのではないか。この時点で柳北は、「有待舎」という隠れ家に、お蝶を住まわせていた。すでに我が手の内にある女を愛でる男の、ある種の余裕のような落ち着きが感じられるのだが。ところで柳北はこの四首の詩に和歌で和するよう、春三に依頼している。巻之二58に後出する春三作の四首の和歌の詞書にそのいきさつが記されている。第一首は柳を愛でる詩であるが、王昌齢の「閨怨詩」との関連があるようだ。

月下微雲點綴來　　月下微雲　点綴し来る
短牆香動一株梅　　短墻　香動く　一株の梅
世間無レ復憐レ才客　　世間　復た　才を憐れむ客無し

た目元。媚びる女性の目つき。○仙槎＝仙人が乗る筏。天の川に浮かぶという。

茸々芳草暖。堪レ眠　　茸々たる芳草　暖かくして眠に堪へたり
滿面春風笑語圓。　　滿面の春風　笑語円かなり
夜雨撲レ花花不レ恨。　　夜雨　花を撲つも　花　恨まず
殘香猶遶酒樽前　　殘香　猶ほ遶る　酒樽の前

語注　○茸々＝草の茂るさま。○堪＝状態をもちこたえる。

㉔　題しらず

見る度にめで度ふしの數そひて根ざしも深き園の若竹‖　晴蓑

語注　○めで度＝めでたき。○そひて＝そふ、は増えること。○根ざし＝地中に根をのばすこと。

評釈　見るたびに節の数が増えて、地面にしっかりと根を張っている庭の若竹であることよ、という歌意なのだが、お竹を詠み込んでいるので、ふしは音曲の節で、お竹に逢うたびに曲のレパートリーがふえていることのようだ。根ざしも深きは三味線の音締めとか歌もよくなっていることをいうか。あるいは、お竹の女っぷりが上がっているというか。

㉕　七夕晴蓑子贈レ魚。籃中加レ竹。賦以鳴謝

七夕、晴蓑子に魚を贈らる。籃中に竹を加ふ。賦して以て鳴謝す　　誰園

鮮鱗遠自二品江隈一　　鮮鱗　遠く　品江の隈よりす
佳節好堪レ揚二一盃一　　佳節　好し　一盃を揚ぐるに堪へたり
却笑先生情思切　　却て笑ふ　先生　情思の切なるを
海魚亦帶二竹枝一來‖　　海魚も　亦た　竹枝を帶び来る

語注　○鳴謝＝心から礼を言う。○品江隈＝品川の海岸。江は海。隈は入江。

評釈　七夕に魚を贈る習慣はないが、七夕に竹はつきものである。おあつらえに魚が届いたので、さっそく一杯やったのだが、ふと、魚に竹がそえてあったのを思い出して、そうか、甫周の奴、お竹恋しさの思い入れを見せたかったのかなと、笑い出してしまった。

㉖　聯句　　仙客　誰園

城北奇才文掩レ口　　城北の奇才　文　口を掩ひ
海西相思感従レ心　　海西の相思　感　心に従ふ

語注　○掩口＝息をひそめる。沈黙する。

評釈　春三と柳北の聯句である。一句目は春三の作。城北の奇才は柳北であろう。屏居中であり、公には文事を遠慮しているということか。二句目は柳北作。海西は城北の対句であろうが、不明。

㉗　ある友のある處より歸り來ていと道學めきたることのみ語りしかば

かしこくも己がまに〳〵爲す道を唐ぶりに語るなよ君　　唯好朝臣

語注　○道学＝道徳の究明と実践を重んずる朱子学を指す。○唐ぶり＝唐様。この場合の「ぶり」は「知ったかぶり」の「ぶり」に近いニュアンス。中華かぶれとでもいうか。

評釈　ある友が誰であるかは不明だが、実際にあったことであろう。道学者めいた言動は、柳北のもっとも忌避するところであった。「己がまに〳〵為す道」に、柳北の儒学者としての基本的な立場が吐露されている。

㉘　幽居三歳。秋聲復起二于階梧一。賦レ之自贈。

幽居三歳、秋声復た階梧に起こる。之を賦して自ら贈る　　誰園主人

秋來秋去又秋來　　秋来り　秋去て　又　秋来る
回レ首浮生眞夢哉　　首を回せば　浮生　真に夢なるかな
夢裏偶然看二蘭菊一　　夢裏　偶然　蘭菊を看るに
花開花落復開花　　花開き　花落ち　復た　開花す

語注　○幽居三歳＝慶応元年の秋を迎えても、柳北は文久三年より三年に渡る閉居の状態にあった。○階梧＝階段のそばにある梧桐。梧桐の葉がひらひらと落ちるのは、秋の到来を告げる典型的な情景である。「桐一葉落ちて天下の秋を知る」は「一葉落ちて天下の秋を知る」（淮南子）よりのバージョン。○浮生＝はかない人生。

評釈　幽居して三年目の秋を迎えた柳北の心境であるが、実はあと数ヶ月もすると、陸軍歩兵頭並に任官することになる。

㉙　題しらず

武隈の松にはあらでわが心竹とり見きて二氣に成ぬる　　早　樹

自註云、なんだかしらぬが、こくうにおもしろくてならぬ、なにかがほしい

語注　○武隈の松＝宮城県岩沼の武隈館にあった二株の老松。相生の松で歌枕になっている。「武隈の松は二木を都人いかがと問はばみきと答へむ」（『後拾遺集』雑四・橘　季通）を踏まえる。二木をご存じかという問いに、「見き」（三木）と答えたというシャレである。○竹とり＝お竹とお鳥の二人の芸妓。○二気＝武隈の松の二木に掛けている。○こくう＝やたら。

評釈　自註に云うのは、甫周である。何やらたわけたことを口走っている。本歌が「二木→見き」であったのが、こちらは「見き→二気」とひっくり返ったのが、偶然なのか、意識的なのかわからぬが、フト気がついて可笑しくてたまらない、といったところ。「二気」は陰陽二つの気の意であるが、お竹とお鳥と両手に花で浮かれ気分をあらわすか。

㉚　題しらず

明暮にまつ身ぞつらし人しれず扇の風の便りいかにと　　唯　好

語注　○人知れず扇＝「あふぎ」は「逢ふ」に通うので、人知れず「逢ふ」を掛ける。○風の便り＝「噂」の意を掛ける。

㉛　竹とりの翁螟蛉を得しときゝてよめりける　　可　愛　叟

歌ひ女にとかく涎をたらちねの教は藝に遊べという覧

語注　○可愛叟＝柳北のこと。㉜参照。○竹とりの翁＝お竹を愛する甫周のこと。○螟蛉＝青虫。養子の意がある。この頃、甫周は黒沢孫四郎を養子に入れようとした。後に破談となる（「随身巻子」）。「成島柳北さんのお世話で、黒沢孫四郎さんが桂川のうちに来られたのは御維新にま近いころで」（今泉みね前掲書四一頁）。○藝に遊ぶ＝学問・技芸を学んで心情を豊かにする。○涎をたらちねの教＝涎を垂らすは、垂乳根の教えに掛かる。

評釈　黒沢孫四郎は当時十六歳。早くから英仏二語に通じる秀才であり、甫周のお気に入りであったようだ（『桂川の人々』最終巻三二八頁）。柳北の歌の主意は、甫周さんよ、芸妓のだれかにうつつを抜かしているお前さんのことだ、その坊やに教えられることといったら、少しは遊んだ方が良いのだよ、ということくらいであろう。

㉜　可愛叟歌　并序

有二一佳人一。喚レ予以二可愛叟一。予仍以爲レ號。朋友皆詰二其説一。

乃作二可愛叟歌一。（詩鈔、有一佳人、作校書玉鸞）

可愛叟の歌　幷に序

一佳人有り。予を喚ぶに可愛叟を以てす。予仍て以て号と為す。朋友皆其の説を詰ふ。乃ち可愛叟の歌を作す。（詩鈔に一佳人を校書玉鸞と作す有り）

可愛叟　可愛叟
問汝何縁獲二此名一
汝貌非レ有二宋朝美一
汝才亦能比二長卿一
饒舌罵レ人聞者熱
横行悖レ世觀者瞠
可愛之實果安在
可愛之名眞可レ驚
叟笑曰唯々否々
公等那識二此名成一
天公一朝與二奇疾一
有レ脚三年不レ得レ行
満城花柳長江月
傷レ心春雨又秋晴
小齋寂寞向レ誰語
濁醪三杯獨自傾
有レ人嫣然入二我夢一
喚二我可愛一豈無レ情
可愛叟　可愛叟
長將二此名一送二此生一

可愛叟　可愛叟
問ふ　汝　何に縁つてか此の名を獲たる
汝が貌　宋朝の美　有るに非ず
汝が才　亦た能く長卿に比せんや
饒舌　人を罵れば　聞く者熱し
横行　世に悖れば　観る者瞠る
可愛の実　果して安くにか在る
可愛の名　真に驚くべし
叟　笑て曰ふ　唯々　否々
公等　那ぞ此の名の成るを識らんや
天公　一朝　奇疾を与ふ
脚有るも　三年　行くことを得ず
満城の花柳　長江の月
心を傷ましむるは　春雨　又た秋晴
小斎　寂寞として　誰に向て語らん
濁醪三杯　独り自ら傾く
人有りて　嫣然として　我が夢に入る
我を可愛と喚ぶ　豈に情無からんや
可愛叟　可愛叟
長へに　此の名を将て此の生を送らん

語注　○可愛叟歌＝作者名はないが、柳北作である。可愛叟は愛すべきお爺さんという意味だが、三年閉居の身の上を、お気の毒という意味の可愛そうにかけている。○詩鈔＝『柳北詩鈔』。○校書＝芸妓。○宋朝＝春秋時代の宋の公子。美男子として知られる。○長卿＝漢の司馬相如の字。詩文に長じた。○天公一朝與奇疾＝柳北が幕閣の忌諱にふれ、閉門の処分を受けたこと。その結果、自由に動き回ることが出来なくなったことを、脚が不自由になる奇病になぞらえている。○長江＝澄江で隅田川のこと。○濁醪＝濁り酒。

評釈　序の（）内に、『柳北詩鈔』との異同が記されているが、『柳北詩鈔』の序はつぎの通り。

有校書玉鸞者、毎來侑酒喚余可愛叟、余以為別号、社友皆詰説、乃作歌以解之

校書玉鸞なる者有り。毎に来たって酒を侑け、余を可愛叟と呼ぶ。

余以て別号と為す。社友皆、其の説を詰ふ。乃ち歌を作って以て之を解く

『柳北詩鈔』は明治に入ってからの編集であるから、序は後に直されたということである。詩は原詩通りである。なお、玉鸞はお鳥のことである（日野龍夫注『成島柳北　大沼枕山』）。お鳥が幽居の身の柳北を「かわいそう」と気の毒がったのを、柳北は「可愛叟」と文字を変換して自らの号とした。さらに幽居に至ったいきさつから、孤独な状況を七言古詩に詠いあげたのである。前半は、友人の口を借りて、美男でもなく、才子でもなく、口は悪いし、行儀も悪い、そんなお前が何で可愛い叟なのか、冗談もほどほどにしろ、と言わせる。それに応えて、三年もの間、幽閉同様の身となって、花見も月見もとんとご無沙汰、一人ぼっちで話し相手もなく、手酌で安酒をひっかけて、ついうとうとしたら、夢で見た女が、本当に可愛そうなお方、と言ってくれたのさ、嬉しいじゃないか、だから可愛叟なのさ。この詩に見られるのは、三年に及ぶ幽居を経て、客観的に自己を見つめている柳北の姿である。当時の社会状況から鑑みて、先行きは決して楽観を許すものではなかった。それでも柳北は幕閣にへつらうことなく、自らの思うままに生きて行こうとする。

㉝　盆中有感。次誰園居士韻

盆中に感有り　誰園居士の韻に次す　　仙　客

新借一軒濟一軒　　新に一軒を借り　一軒を済す
遇偸綯索颶修垣　　偸に遇ひて索を綯ひ　颶ありて垣を修す
舟行被誘出無勢　　舟行　誘るるも　出るに勢無し
熱氣未全過咽元　　熱気　未だ全くは咽元を過ぎず

語注　○盆中＝盂蘭盆の期間中。○済一軒＝済は返済するの意。○偸＝盗人。○綯＝縄をなう。あざなう。○遇偸綯索＝俚言「泥棒を見て縄を綯う」。○颶＝暴風。つむじ風。○熱気未全過咽元＝俚言「喉元過れば熱さを忘れる」を踏まえる。

評釈　盆中といえば暑い最中である。そんな時に、新に家一軒を借りて、前の家の店賃を払うことになったのだが、泥棒を見て縄をなったり、嵐が来てから垣根を直すのと同じで、どこかちぐはぐだ、ということか。舟遊びに誘われても出る気はまったくなし。この暑さには、ほとほと閉口するという春三の狂詩。

㉞　題しらず

きみは亀井戸わしや墨田川同じ色香で氣がもめる　　作者さだかならず

参考　「随身巻子」一裏の記事。

（慶応元年）七月廿一日晴

午後より成島へ参り福田楠山來リ夜二ツ時迄

Goed　Rivier 云々

B來ル快極る

きみハ亀井戸わしや

すみ田川　おなし　色香で氣がもめる

亀井戸は古梅荘也　隅田川ハ新梅荘也　妙

語注　○福田＝福田作太郎。徒目付。後に歩兵頭。○楠山＝楠山孝三郎。柳北の実兄と目される人物。○Goed　Rivier＝オランダ語でよい川。○B＝芸妓のお鳥。○古梅荘＝亀井戸天神にあった梅屋敷。臥龍梅で知られた。○新梅荘＝文化年間、佐原菊塢により向島に開かれた梅園。新梅屋敷と呼ばれた。現在の向島百花園。

評釈　「作者さだかならず」とあるが、記事の終りに甫周の筆で「妙」とあるので、作者は甫周ではない。となると、柳北作としたい。柳北の梅への熱中ぶりは尋常ではなかった。亀戸にするか、向島にするか、ああ、気がもめるというところであるが、この都々逸の前に、「B来ル快極る」とあり、甫周と柳北のお鳥をめぐっての駆け引きが、暗に詠み込まれているのかもしれない。

㉟　題しらず

秋の野に（異本鳥部野に）置くしら露やあはれ世に　晴　蓑

物おもふ人の涙なる覧

語注　○秋の野に置くしら露＝異本鳥部野に、とあるように、化野の露の意で、はかない命のこと。

㊱　消息のはしに　仝

我戀は心の關をうちこえてみちもなきまでふみ迷ひ鳧

語注　○心の関＝思いが通じないで滞ることを関所にたとえる。

評釈　㉟㊱は甫周の作。

㊲　中秋偶得　可愛叟

算來人事太憂多　算へ来れば　人事　太だ憂ひ多し

青眼唯當レ注二綺羅一　青眼　唯だ当(まさ)に綺羅に注ぐべし

最是誰園今夜月　最も是れ　誰園　今夜の月

清光依レ舊照二嬌蛾一　清光　旧に依りて　嬌蛾を照らす

語注　○人事＝人間社会の事柄。○青眼＝好意的な視線。○綺羅＝美しい衣服。ここでは着飾った美人。○最是＝もっとも心を動かすものは。○誰園＝柳北邸の庭。○清光＝中秋の名月。○嬌蛾＝美人。

㊳　　早　樹

望月のかくとしりせば呉竹の
　　つらきをこゝに植ざらましを
うつし植しちひろの影を今さらに
　　はらひかねたる望月のそら

語注　○呉竹＝竹は甫周の愛人である芸妓のお竹。○ちひろ＝千尋草。竹の異名。

評釈　甫周（早樹）のお竹への綿々たる恋情が吐露されている。二首とも「望月と竹」が主題になっているが、おそらく『竹取物語』に関係するか。「ひるのあかさにもすぎて光たり。もち月のあかさを十合せたるばかりにて」。お竹をかぐや姫になぞらえているのであろう。

㊴　中秋席上。次二可愛叟韵一。併爲レ叟解レ嘲。

中秋の席上。可愛叟の韵に次し、併て叟の為に嘲を解く　　臥　孟

自レ古英雄好レ色多　　古より　英雄　色を好むこと多し
毎レ見二細腰一羨二輕羅一　　細腰を見る毎に　軽羅を羨む
天下無三人不二薄倖一　　天下　人として薄倖ならざるは無し
悪漢何偏算二玉蛾一　　悪漢　何ぞ偏へに玉蛾を算へん
　　社中悪漢。皆呼レ叟爲二悪漢一。故有二此解一。

社中の悪漢、皆、叟を呼びて悪漢と為す。故に此の解有り。

語注　○臥孟＝柳河春三。○軽羅＝薄絹。［劉廷之・公子行］「願作軽羅着細腰」。○薄倖＝浮気なこと。薄情者。○玉蛾＝柳北の愛人のお蝶。

評釈　男は皆、女が好きだし、誰だって浮気心の一つはあるものだが、柳北を悪漢とするなら、どうしてお蝶ひと筋ということがあろうか。柳北は悪漢ではないのである。社中のワルどもが、柳北さんを悪漢呼ばわりするので、なり代わって弁解させてもらう。

㊵　東小歌一首寄二可愛叟一

東小歌一首、可愛叟に寄す　　作者不詳

かあい叟だよ三年達磨
　それじや（デモ一本）おあしがたまるまい

若レ此則尊脚恐不レ得レ堪矣、又雖レ如レ此則黄白恐不レ得レ積矣、
此の若(ごと)ければ則ち尊脚は恐らく堪るを得ず。又、此の如きと雖も則ち黄白は恐らく積むを得ず

語注　○東小歌＝都々逸を漢語風に言い換えた。○作者不詳＝柳北作とみる。自嘲の歌であるから、本人以外にありえない。○三年達磨＝柳北の三年幽居をさす。○おあし＝お足とお金(あし)を掛ける。達磨は座ったきりであるから、脚がしびれてたまるまいと、お金がたまるまいを掛ける。○尊脚＝達磨は高僧であるから、敬意をこめていう。○黄白＝金銭のこと。

評釈　三年の幽居を達磨になぞらえた自嘲の小歌である。それを漢訳したのが、若此云々である。

㊶　題「仙客剃レ頭圖」

仙客頭を剃る図に題す

可愛叟

一雙花映一輪月
側面山抽前面雲

一双の花は映ず　一輪の月
側面の山は抽んず　前面の雲

語注　○一双花、一輪月、側面山、前面雲＝いずれも二重傍線にしてあるが、未詳。

評釈　仙客が春三であるとすると、誰かが戯れに、春三が頭を剃る絵を描いたのであろうか。それとも仙人が頭を剃る図か。

㊷　寄「仙客」

仙客に寄す

無名氏

人事誰能占「十分」
花前風雨月邊雲
何當移「宅湖山上」
香雪枝頭着「我文」

人事　誰か能く十分を占めん
花前の風雨　月辺の雲
何か当(いつ)に宅を湖山の上に移し
香雪　枝頭　我が文を着くべし

語注　○無名氏＝柳北。○香雪＝香りのある白い花、すなわち梅花を喩えていう。○枝頭＝枝の先。

参考　○「随身巻子」四表の記事

柳河より返書之端ニ有之候ソノママ
泉橋より之文通写　モトノママ写し候ツモリノ処紛失仕候
過日之帰路如何月子さためてオイルにすべり可申と心配不少候
云々
百事常憂(忘却ノ処)不十分
花前風雨月邊雲
何當移宅湖山上
香雪枝頭着我文

柳河春三から甫周に宛てた返書の終りに書かれていたのは、泉橋（和泉橋近くに住む柳北をさす）からの春三宛の手紙の写しであった。文意は、柳北邸で会合があり、甫周と春三がいた。会の後日、春三の帰路の無事を問い、月子（甫周の号、月池をさす）の安否を気遣っている。七絶の起句に異同があるのは、常憂に「忘却ノ処」と傍註してある通りであり、「人事誰能」が「百事常憂」に、「占」も「不」になっている。結句の香雪と文は当日陪席したお香、お雪とお文のようである。無名氏は当然、柳北である。また、「オイルにすべり」について、今泉氏は「お月さまいくつ」の唄の「油屋の前ですべってころんで」をもじって、月氏（甫周）がオイルにすべり云々といったのであろう（『桂川の人々』最終巻三三一頁）、と述べている。

評釈　人の世は思い通りに運ぶものではない。花時の嵐、月を隠そうとする雲のように、何が起こるかわからない。いつか、世を避けて遠く山水の地に引っ越して、お香、お雪、お文などと一緒に遊んでみたいものよ、といったところが詩意か。結句は花をつけた梅の枝先に、私の文を結んでみたいものだ、というところか。この手紙は、「随身巻子」四表の前後の記事から推定すると、八月下旬に出されているのだが、梅花とは季節的に合わない。いずれにしても、ほろ酔い気分で柳北邸を出たであろう二人を気遣う気持が、手紙文にあらわれて、この三人は本当に仲が良かったのだろうと、思わせる。

㊸　嚢無「阿堵」といふ消息をみて

嚢に阿堵無しといふ消息をみて　　仙客

さびしさに君が玉章(たまづさ)ながむればいづこも同じ秋の夕暮

語注　○嚢＝財布。巾着。○阿堵＝六朝、唐の俗語で、あれ、それ。阿堵物は銭。○玉章＝手紙。

評釈　「さびしさに宿を立ち出でてながむればいづくも同じ秋の夕暮」（『後拾遺集』良暹）の春三のパロディ。

㊹　偶得

偶(たまたま)ま得たり

又　　早　樹

‖月光頻照梅花畔　　月光　頻りに照す　梅花の畔
‖鳥語偶聞楊柳陰　　鳥語　偶ま聞く　楊柳の陰

語注　○月、梅、鳥は芸妓の名。柳は柳北その人か。

評釈＝梅の花が月明かりに照らされている夜更けのさなか、どこからかお鳥の話す声がする。そばにいるのは柳北さんか。梅花の頃には、柳はまだ芽吹いていないから、楊柳は柳北とみた方がよいのではないか。

㊺　　早　樹

秋のよはかやゝお鳥‖の迷ふらん月に塒の影をとられて

語注　○かやや＝茅屋。○鳥＝芸妓のお鳥。

評釈　「かやゝ」と「鳥」の間の「お」が不明。「お鳥」とするのが自然だが、芸妓の名を歌の中で、具体的に「お鳥」などとは通常使うまい。狂歌であれば許されるか。早樹は甫周のこと。

㊻　十六夜歸るさによめる

十六夜は達磨‖がひとり泣夜かな　　早　樹

語注　○達磨＝娼婦。すぐころぶから、という。

評釈　十六夜の月明かりのなか、家路を急ぐ甫周。妙にもの寂しく、こんな晩にはお茶をひいている達磨の姐さんのすすり泣きが聞こえてくるようだ。どこか、凄絶な句である。

㊼　　早　樹

別れては又逢ふ迄のうき夜々としらでや月‖の澄渡る覧

評釈　「随身巻子」三表には、

二首とも
題しらず　　竹子

わかれては又あふまでのうき夜々
しらでや月の澄ミ渡るらん

つばさなき小鳥の身こそ侘しけれ
ゆきてあふべき道しなければは　　鳥子

とあり、作者を芸妓のお竹とお鳥にしている。柳北はこのことを知っ

ていて早樹（甫周）作としたのであろう。

㊽　或人返し

わかれては又逢ふ迄のフロールを
どうして月‖のくめんするらん

語注　○くめん＝工面。

評釈　「随身巻子」三表にはこの返しが記載されていない。おそらく「随身巻子」の方が先に記述されているから、「返し」が無いのである。ちなみに「随身巻子」に記されたのは慶応六年七月頃と推定され、『伊都満底草』にも。前後の記事から同じ頃に記されたものと思われる。したがって、この或人は柳北とするのが妥当である。今泉氏は「フロールはflowerで花、妓の名か」（『桂川の人々』三〇三頁）としている。

㊾　　早　樹

つばさなき小鳥‖の身こそわびしけれ
行て逢ふべき路しなければ

評釈　本来は鳥子の作として「随身巻子」三表に記載されていた。

㊿　或人返し

つばさなき小鳥の身こそうれしけれ
行て逢ふたら探られやせん

評釈　㊽と同様の理由で、或人は柳北である。（柳北には）翼が無いのが幸いだ。「探られやせん」は、あれこれと詮索されるであろうの意。

51　ある女に代りて竹鳥の翁へ　　仙　客

ころばせもせずころびもせねどハィョ
ぬしの油にやノー勝‖さんすべります

語注　○竹鳥の翁＝「竹取の翁」ではなく、「竹鳥の翁」であり、芸妓お竹とお鳥を愛した甫周のこと。○仙客＝柳河春三。○ぬしの油＝油はおだてること、へつらいの意で、油を言う、などと使う。○勝さん＝不明。

評釈　「随身巻子」八表に同じ文句があるが、詞書の「ある女」が「阿竹」になっており、ある女はお竹である。「竹鳥の翁」も「竹取の翁」になっており、51で変えられていることが分る。また、「勝さん」には、「カチ」とルビが振ってある。文句の終りに、「ショコトガナイヨ」の囃し詞がくりかえされている。なお、「随身巻子」八表には、この戯れ

唄の前に、四表の記事にある「百事常憂不十分」にはじまる絶句が、再録されている。

㊷　題しらず　　星　槎

油でかためた座敷ときゝてみれば藝者のあらひ髪

語注　○星槎＝甫周のこと。○油でかためた＝不明。

㊸　思レ舊感レ今詩
旧を思ひ今を感ずる詩　　情痴生

花柳滿城能幾時　　花柳　満城　能く幾時ぞ
何堪愁裏把二金巵一　　何ぞ堪へん　愁裏　金巵を把ることを
蹇驢久負江山勝　　蹇驢　久しく負く　江山の勝
小閣慵レ看水石奇　　小閣　看るに慵し　水石の奇なるを

語注　○情痴生＝詩意から柳北。○蹇驢＝ケンロ。足の不自由な驢馬。幽居の身を例えている。○小閣＝閣は女性の部屋。お蝶を囲った有待舎か。

評釈　昔は花柳の地を派手に遊びまわったものだが、今や幽居の身とあっては盃をとっても憂さは晴れぬ。そういう次第であるから、花見や月見もすっかりご無沙汰で、庭の景色を眺めるのもいささか面倒な気分である。

千巻圖書半終レ業　　千巻の図書　半ば業を終へたり
一枝梅蕾未レ題レ詩　　一枝の梅蕾　未だ詩を題せず
湘簾寂寞雲屏冷　　湘簾　寂寞として　雲屏　冷やかなり
徒取二春光一付二蝶児一　　徒らに　春光を取りて　蝶児に付すのみ

愛篁子評曰。詩中字眼十有六箇。奇絶妙絶。
愛篁子評して曰く、詩中に字眼十有六箇あり、奇絶妙絶なり。

語注　○湘簾＝竹のすだれ。○雲屏＝雲母をちらした屏風か。○春光＝春の景色。○蝶児＝側室のお蝶。○愛篁子＝甫周のこと。○字眼＝詩文でその出来栄えを左右する最も重要な文字。

評釈　同じく幽居の詩。千巻の書物も半ばは読み終えた。外はいつの間にか梅がほころび始めたようだが、詩を題することもしていない。竹の簾は物寂しく揺れ、きらきらの屏風は冷え冷えとしている。ただもう、春の日を浴びて蝶児と過ごすのみである。㊸の二首に対する甫周の評に「詩中有字眼十有六」とあり、丸の傍点が付いた字が二首合わせて十六有る。この十六字は馴染みの芸妓の名前であろ

う。だからこそ、奇絶妙絶なのである。

㊹

おまいこんきになさるといへどハヽヨ
おばの所へノーやなさんやりまする
ショコトガナイヨ〳〵

無常齋述

評釈　「隋身巻子」の記述は甫周であろう。お香に頼みたいのだけれど難しそうだから、お千代婆さんに周旋を頼んだ。そのお千代さんにも断られた。「やなさん」が春三であるとすれば、後は世事にたけた春三に口添えをしてもらうしかない、といったところであろう。

㊺　題しらず　　春影

物おもひもなくてみるべき常夏に
しめゆふ人のねたくもある哉

語注　○春蔭＝柳河春三。○常＝芸妓のお常を詠み込むか。○常夏（とこなつ）＝なでしこの花の異名。歌では、その名から夏の景物として詠まれ、「床」との関連で、恋のイメージをもち、「塵」や「寝る」を詠み込むことが多い。○しめゆふ＝しめ結ふ。道標のしるしとして草などを結ぶこと。

㊻　或人の口ずさみに
安兄と小町は馬鹿だナーサング

語注　○安兄＝英学者である安田次郎吉のこと。柳北、甫周、安田は気の合った仲間であった。○ナーサング＝未詳。

参考　「随身巻子」八裏に次のようにある。
阿香に話しせば六ヶ敷　千代老婆ニ周旋を頼ミてよめりける
「おまへ出来ぬといはんすけれどハイヨ
周旋せぬとはノウ千代サン
なさけない
皆々内證〳〵
「おまへコンキになさるといへどハヽヨ
おばの所へノウ　ヤナサン　やりまァする
ショコトガナイヨ〳〵

語注　○無常齋＝「随身巻子」八裏の記事からすると、甫周であろう。○こんきに＝根気よく。長続きする。○やなさん＝柳河春三か。

参考　柳北に安田との惜別の詩がある（『柳北詩鈔』）。

送下安運甓之二金川一　就二洋客一學中英書上

安運甓の金川に之き、洋客に就ひて英書を学ばんとするを送る

君業成如二我業成一　君が業の成るは　我が業の成るが如し

祖筵何説別離情　祖筵何ぞ説かん　別離の情

請君他日若思レ我　請ふ　君　他日若し我を思はば

讀課為レ添多少程　読課　添へることを為せ　多少の程

語注　○安運甓＝運甓は安田次郎吉の号。○金川＝神奈川。○洋客＝外国人。○祖筵＝送別の宴会。○読課＝英書を読む課業。

また、『柳北全集』所収の「面白カラズノ雪」に次の記述がある。

明治ノ初メニヤ有リケン、正月ノ中旬雪降リシ日、亡友安田運甓桂川月池ノ両人ヲ伴ヒ、柳橋ヨリ舟ニ乗リ名妓三名美酒一樽ヲ携ヘテ柳島ニ遊ビタリシニ、雪ノ景色殊ニ面白カリシ、此ノ遊ビハ両才子三佳人有テ故サラニ情景ヲ添タルモノカ、前後ニ此ノ快樂ハ無カリシナリ。

⑤⑦　九月朔晴蓑子より來る新聞

亀の子をとつゝかまへてたゝいたら

奇々妙々

コーサンシタといふがおかしき

降参仕候

近日の大出来と存候

評云、何物悪漢作二此厭巻一。

語注　○晴簑子＝甫周のこと。○新聞＝新しい話題。○コーサンシタ＝添え書きは柳北であろう。○近日の大出来と存候＝甫周の評である。○評云＝これも柳北の評。○厭巻＝厭は、極めるの意で、上出来の作といった意味であろう。

評釈　「随身巻子」七表に

このいと巻

亀の子をとつておさへて（「ておさへて」を「ゝかまへて」に直して、「とつゝかまへて」にしている）

たゝいたら

コーサンしたといふぞ

おかしき

とある。作者は春三あたりではないか。悪漢というのも春三を暗示している。甫周も柳北も、いたく気に入っているが、こういう作の面白さは理解しずらい。

⑱ 可愛叟有二品香評色詩一。見レ示。且囑レ吾和レ之。吾不レ嫺二吟咏一。固辭不レ允。偶得二詠レ月國風四章一。聊擬二其意一。以塞二其責一云。

可愛叟に品香評色詩有りて、示さる。且つ吾に之に和することを囑す。吾れ吟詠に嫺れず。固辞するに允さず。偶ま月を詠ずる国風四章を得たり。聊か其の意に擬し、以て其の責を塞ぐと云ふ。

柳屋主人淑麿

あはれ誰袖の露にか宿るらむまた山の端の十六夜の月
雲だにも無らましかば秋の月餘に影のまばゆからまし
目に近くみゆる物から久堅の月の宮姫あふよしぞなき
うち向ふ月は心もなかりけりなど見る人の物思ふらん

語注 ○柳屋主人淑麿＝柳河春三のこと。○品香評色詩＝㉓に前出。○嫺＝なれる。熟達する。○国風＝和歌のこと。○袖の露＝悲しみの涙で袖がぬれること。

評釈 ㉓の柳北の品香評色詩四首に対し歌で和す、という柳北の要求に対し、春三は月を詠んだ歌四首で応えた。柳北の七言絶句は四首とも、女の色香を連想させる艶っぽい作であるが、そうした柳北の歌の意図をさらりとかわし、静謐な月の世界を愛でるような作によって、「その意に擬し、以て其の責を塞ぐ」のである。

⑲ 題しらず

よみ人しらず

さそはぬも春の旦は咲く花を秋の暮にと思ひけるかな
思ひきや待宵ならで逢ふ夜半に更行鐘を恨むべしとは

⑳ 消息のはしに

早樹

節前に借金乞の聲きけばあかぬ別れの鳥はものかは

自註おもひきらうかしらん

或者云、このお氣色にては燈下に雑巾を刺してもショコトガアリマスマイ子

参考 「随身巻子」十一表には次のようにある。

消息のはしに　難波津の梅男

さそはぬも春のあしたにさく花を
秋の暮にとおもひける成
おもひきや待宵ならて逢夜ハニ
更行鐘をうらむべしとハ

返事に　寢覚の早樹

節前ニ借金とりの聲きけば

あかぬワかれの鳥はものかハ

とあって、若干の異同がある。自註以下は載ってない。

語注（59、60）○よみ人しらず＝59の和歌二首は、「隋身巻子」の甫周宛ての手紙の終わりの歌二首とほぼ同じで、作者は難波津梅男とある。今泉氏によれば柳北であるという。○節前＝節は「隋身巻子」にはモノとルビがあり、物日のことで、借金の清算をせねばならない節季の前の意。作者は甫周である。○思ひきやの歌＝本歌は「待つ宵にふけゆく鐘の聲聞けばあかぬ別れの鳥はものかは」（『新古今集』恋三・一一九一）である。返しの歌も本歌を踏まえている。○借金乞＝借金取り。○自註＝自註とあるから、作者の甫周の註と見えるが、「隋身巻子」には記載がないので、自註とかたって、柳北がつけたのではないか、或者云も柳北のものであろう。

評釈　59、60は柳北の和歌と甫周の狂歌の応酬である。主題は芸妓お鳥に対する甫周の想いである。柳北は、お鳥への甫周の態度がまだるっこしい、いつまでぐずぐずしているのだと、けしかけている。これに対して、ふところ具合のあまりよくない甫周は、節季を目前にして、それでなくとも物入りなのに、借金取りに来られては、もはやどうしようもなく、お手上げだと、ボヤいている。そこで柳北は自註とかたって、節季の借金取りの声に比べたら、後夜の鳥の声などはどうということもない、と詠む。そして今さら夜なべ仕事をしたところで、いくらになるものではないヨ、お鳥はあきらめろと、追い打ちをかける。

61　重九諸氏來酌。余頃日舉一男。賦此自嘲

重九に諸氏来酌す。余、頃日一男を挙ぐ。此を賦して自嘲す。

誰園生

三瓦纍然添一一章　　三瓦　累然として　一章を添ふ
阿爺早晩鬢應霜　　阿爺　早晩　鬢　応に霜すべし
風懐何事未鎖盡　　風懐　何事ぞ　未だ鎖し盡さざる
叉採黄花登酒場　　又　黄花を採りて酒場に登る

黄花春ならば某花に作るべく遺憾々々

語注　○重九＝九月九日の重陽の節句。○挙一男＝側室のお蝶との子か。○自嘲＝このとき柳北数えの二十九歳。詩の内容から、早くも老いを意識しているのか。○三瓦＝「弄瓦」に女の子が生れるという意味がある。三瓦はしたがって、三人の女の子が続いたのであろう。一章は玉のような男の子の意。○累然＝重ねて続く状態。○風懐＝風流な想い。雅な心。○黄花＝菊の花であるが、お菊という芸妓の名であろう。○登酒場＝重陽の節句には、山に登って菊酒を飲む慣しであることを踏まえる。○註の某花云々＝花は芸妓を意味し、黄花はお菊で、本当は別の花（女の名で、おそらくお梅）を使

いたいのだが、それは春の花なのでそうもいかず、遺憾々々というわけであろう。

評釈　おそらく初めての男子が誕生したのに、なぜ自嘲するのであろうか。間もなく頭に霜を戴く老いがせまりつつあるので、年甲斐もなく、子を生してしまった、という意味での自嘲か。それにしても風流韻事に未練は残るし、重陽の祝の酒を飲もうではないかと、意気軒昂であるし、黄花云々の注も遊びへのこだわりがあって、いかにも柳北らしい。

⑫　七夜あまり御麁末様申譯迄認參候

七夜あまり御麁末（おそまつ）様申し訳け迄に認（したた）め参り候

七夜々々といはんすけれどハイヨ
何を出すにもノーミナサン金がない
御免ナサイヨサイヨ、

（七は質と、夜は屋と通ず）　（七與質、夜與屋通）

語注　○七夜＝柳北が男子を挙げた祝いの七夜。

評釈　（）内の注により、七夜と質屋をかけた都々逸である。

⑬　南海より來る新聞

おつこちとなる氣で登る亀のこう
ふみにくからうあたまはげ山

語注　○南海＝品川の遊里。○おつこち＝恋におちいること。情人。

評釈　同じ文句、「随身巻子」九表にもある。「亀」「こう」「ふみ」は芸妓の名であろう。

⑭　續詠月詩

往返りみれどもみれど大ぞらの同じ所にすめる月かな　柳屋生

語注　○柳屋生＝柳河春三のこと。○すめる＝住むと澄むを掛ける。

⑮　續品香評色詩

続香を品し色を評するの詩　誰園生

天桃花上露無聲　天桃花上　露に声無く
深鎖仙扃夢不驚　深く仙扃を鎖して　夢　驚かず
他日劉郎若來訪　他日　劉郎　若し　来訪せば

丹唇一笑始相迎　　丹唇一笑　始めて相ひ迎へん

奇想降於天　　奇想天より降る

語注　○天桃＝若い桃。一人前でない芸妓をさす。○花＝妓女の意あり。○扃＝けい。かんぬき。出入り口。○劉郎＝後漢の劉晨は阮肇と共に天台山に採薬に行き、桃を食べて仙女と交わりを結んだのち、家に戻った。しかし、再びそこを訪れようとしたが、到ることができなかった、という「劉阮天台」（『蒙求』）の話をふまえる。

評釈　おぼこな禿（かむろ）を実の若い桃にたとえて、一人前になる日を待つ。今は手を出せる状況ではないが、やがて紅をさした口元がほころんで、わたしを迎えてくれる日が来るにちがいない、「劉阮天台」の話と違って。評は誰によるか。

芳蕾壓レ枝枝欲レ垂　　芳蕾　枝を圧し　枝は垂れんと欲す
雨餘新漲滿二春池一　　雨余の新漲　春池満ちたり
香閨休レ説意中事　　香閨　説くことを休めよ　意中の事
情語恐教二鸚鵡知一　　情語　恐らくは鸚鵡をして知らしめん

語注　○芳蕾＝咲き初める瞬間のかぐわしさを放す蕾。○香閨＝女性の部屋。○情語＝閨中での睦言。○鸚鵡＝『礼記』曲礼上「鸚鵡能言　不離飛鳥」とあり、鳥だが人語を解する。

評釈　前の七絶を受けた後日談の詩か、あるいは対比的に閨中の女の艶めかしさを詠ったか。いずれにしても、閨房中の情語を鸚鵡に聴かれると、鸚鵡がそれを他人に喋る恐れがあるから、ここは静かにしていようよ、というところ。

⑥⑥　ある女の口ずさみに

箱新さんは（作ヲーリースキさんは如何）なぜおそい
わらじ（和蘭字彙）が賣れぬ（ハケヌ異本）か舟留め歟

⑥⑦　消息のはしに

第一世　藐姑射（はこや）仙人

わらんじがはけりや直さまかけ出に
大傘で立て居れども
（自註云、よほどうまし）

参考　⑥⑥と⑥⑦は連動しており、「随身巻子」十一裏に、次のようにある。

九月十二日曇　柳河より並之ハルマ壱部入用の趣８ｋｏ爲持受取之人來　即引かへ渡タス竹屋新右衛門之方へ左の狂歌一首來る

或る女の口ずさみに
はこ新さんハなぜおそい

わらじがはけぬか舟どめ歟

とあって、㊻の狂歌が記載されている。㊼の「消息のはしに」の文句と関連があり、背景を含めて、今泉氏は次のように解説している。（『桂川の人々』第九歌三三七頁）。

第一世藐姑射仙人は柳河春三。藐姑山上に住んで霞を喫っている仙人である、と春三は自称し、甫周を第二世藐姑射と呼んだ。藐姑射は他面芸者について歩るいて三味線箱をかつぐ箱屋に通じているところから、甫周をBoxmanともじって呼んだ。新右衛門はcinnamonの肉桂から、桂の隠語、箱新は箱屋新右衛門の略称。竹屋は甫周が芸者お竹を愛していたからであろう。（中略）重陽（九月九日）の節句前まで、桂川では支払うべき借金があって［㊿］の甫周の「節前に借金乞と聲きけばあかぬ別れの鳥はものかは」の歌に示されていること。「随身巻子」では十一表、十一裏と続いて記載されており、十一裏の日付が九月十二日であることにつながる」、柳橋のほうで、柳北や春三が甫周の来るのを当てに待っていたが、甫周は金がないので行けない。そこで春三が助け船を出してハルマ一部を小判八枚で売る周旋をして使いの者を甫周のもとへ送って代金引き替えに『和蘭字彙』一部を受け取らした。そこで甫周は急に威勢が良くなって、助六まがいに大傘を広げて柳橋に繰り込める、というようなしゃれをうたい合った狂歌である。とにかく閉門を覚悟で甫周が始めた『和蘭字彙』刊行が思いも寄らない救いの神ともなった時勢の変転を物語る一こまである。

語注　○「ある女の口ずさみに」この狂歌は春三の作であろう。箱新の命名者でもあるから。○ヲーリースキ＝折助（中間、小者の異称）のことか。○わらんじ＝わらじ。和蘭字彙（ズーフ・ハルマ）との掛詞。○和蘭字彙＝写本でのみ伝えられた蘭和辞書「ズーフ・ハルマ」を幕末、桂川甫周などが改訂・出版した大部のオランダ語の辞書。この辞書を発行するに当たっては、幕府と激しいやりとりがあったと伝えられている。結果的には好評で、桂川家にとっても思いも掛けぬ経済的余裕をもたらすことになる。○ハケヌ異本＝「随身巻子」では「わらじがはけぬか」とあるのを示す。ただし十一裏の原本には、「わらじがうれぬか」とあるものの、「うれ」の傍らに「はけ」の書き込みがあり、「うれぬ」よりは「はけぬ」方が、「わらじをはく」と「和蘭字彙がはける」の両義が生れるので、よしとしたのであろう。このことにより、柳北が甫周の「随身巻子」を見ていたことが立証される。○藐姑射仙人＝［荘子・逍遥遊「藐姑射之山　有神人居焉」］。

評釈　㊻の狂歌には、〇に柳北が注を入れている。「箱屋」よりは「折助にしたほうがよいのでは」という注文、「わらじ」は「和蘭字彙」の掛詞であるとしている。さらに「売れぬ」に（異本ハケヌ）を注しているが、今泉氏が解説しているような仲間内のいきさつは、

こうした注を付けないと、分らないのである。柳北に「伊都満底草」を公開する意図はなかったと思われるが、心覚えのためにも、こうした注は必要であったのであろう。『和蘭字彙』は安政二年～五年（一八五五～五八）にかけて完成。現代の英和辞典をはじめとする外国語辞典の源流として位置づけられている大事業であった。今泉みねの『名ごりの夢』には、甫周邸での編集事業についての経緯が詳しく書かれている。

㊽　再續詠月詩

再び月を詠む詩に続けて

たがための露の宿りか女郎花こたへぬ月の影ぞ乱るゝ　　臥孟生

語注　○再続＝㊽の月を詠んだ四首の歌に関連する作である。○臥孟生＝柳河春三のこと。○露の宿り＝涙でぬれること。

㊾　又　無題

玉簾（たまだれ）のをす捲あげてしづかにもみるべき月を荻の上風

評云、この風はまことに鼻もちならぬ香がござイ升ヨ

語注　○又＝作は柳河春三。○玉簾の＝玉垂れの、をす（小簾）にかかる。万葉集七・一〇七三「玉垂之小簾の間通し一人ゐて見るしるしなき夕月夜かも（作者未詳）」

評釈　評は柳北か。なぜ、鼻もちならぬのか。仲間内にのみ通じる評である。

㊿　ある日席上にて或る悪漢いはゆる話家といふものゝまねしていひ出ける落話（おとしばなし）

「盲龜の浮木といふことがありますが。さだめて其たとへは嬉しいことのたとへでありませうが。その木は何でありませう歟」

「さやうさ。物産家に見せても。植木屋に見せてもわからないと申し升。一人が曰「大かたカンホルでもありませうヨ

に非ずならん

語注　○盲亀の浮木＝海中から百年に一度しか浮かび上がってこない盲目の亀が、海面に首を出した時、流れただよっている浮木の一つしかない穴に首がちょうどはいるという、雑阿含経、涅槃経などにある話。滅多にないことのたとえ。○カンホル＝オランダ語のカンフル（kamfer）なら、樟脳のことであるが、木の名前であれば原料になる樟（くすのき）か。

71　又

「オヤ〳〵さうでござイ升か。それではわたしもそんな木がほ

しいものでござり升「さうか。ほしいも尤だが。マアよしにしたほうがよかろう」「そりゃ又なぜでござり升。しばらく考へながら」「ナニ外でもねへが實はその木は長くおくと石になるといふ事だから」「そりやほんとであり升か」「ナニおいらがうそをつくものか」「それじやア實にうれしうござり升」「それはなぜだへ。少しはづかしきおもいれにて」「それはね。みなさんが石がめと申しますものを

評釈　⑦⓪、⑦①は連動している。⑦⓪の絵入りの亀のところは、ただの亀ではなく、海亀であるべきだ、というニュアンスであろう。⑦①では、盲亀の浮木の木が石になるのを喜んだのは、普通の亀（石亀）である「わたし」と同じ、石という共通項が出てきたからという、言葉あそびである。

慶應元年九月十三夜一校了

伊都満底草巻三

①　晩秋十四日聯句　　晩秋十四日の聯句

浦島忘レ亀行騎レ鶴　　浦島　亀を忘れて　行くに鶴に騎す
子猷捨レ竹去捫レ虱　　子猷　竹を捨てて　去りて虱を捫る

②　又　　又

五更呼レ酒假二秋水一　　五更　酒を呼ぶに　秋水を仮り
二両揮レ豪眞大金　　二両　豪を揮ひて　真に大金

語注＝○晩秋十四日＝慶応元年九月十四日。①と②は同じ日に詠まれており、「随身巻子」十三表に同じ聯句あり。○浦島＝幽居三年の柳北を暗示する。○亀＝浦島に亀はつきものであるが、ここではお亀という名の芸妓であろう。○騎鶴＝男の夢は十万の銭を持ち、鶴に騎って揚州に遊ぶこと。「鶴」も芸妓のお鶴か。○子猷＝王羲之の五男、王徽之の字。竹を愛したことで知られる。お竹を愛する甫周をしめすか。○捫虱＝あたりを気にせず無頓着なこと。前秦の王猛の故事による。「晋・符堅載記下」「捫蝨而言、旁若無人」。○五更＝午前四時。○秋水＝宇都宮三郎の雅号ではあるが。○二両＝揮毫料として二両入ったか。○揮豪＝揮毫の誤植か。○真大金＝真に大金で、

思わぬ大金が入ったこと。

評釈　①②ともに晩秋十四日の作であるから、月見の会で詠まれた狂詩の聯句である。①は浦島がお亀を忘れて鶴に乗って遊びに行ってしまい、子猷はお竹を捨てたまま知らん顔、というのだが、浦島が柳北で、子猷が甫周であることは、ほぼ間違いない。二人による聯句で、お互いに相手のことを揶揄しているところから、第一句は甫周、第二句は柳北の作であろう。②は、一句目二句目の作者が柳北・甫周のどちらなのか決めかねるし、句意も判然としない。ただ、五更に酒を求めたとあるので、暁方ちかくまで会はつづけられたようだ。会が催されたのは柳北邸か甫周邸か、どちらなのかという問題がある。と言うのは、「随身巻子」十三表にも同じ聯句が記載されているからだ。ところで、「随身巻子」十二裏から十五裏までを今泉氏は『桂川の人々』に載せていないが、この巻三の①から⑪までの作のうちのいくつかが、重複している。「伊都満底草」と「随身巻子」の関係を見るのに、重要と思われるので、適宜ひもといてみよう。①と②と同じ聯句に続いて、「随身巻子」十三表から十三裏にはつぎのような歌が記されている。

十三表　月の哥讀けるうちニ　　弘

おもひ出ぬかりねの宿の草枕月をやどせし夜はもありしを

十三裏

すみなれし草屋の壁のきり〴〵すおなじ憐を月になくらし

忘れつる人の言葉も月に今おもひ出でつゝ袖ぞぬれぬる

兎角にこゝろなくさめがたくこゝろ覺ゆれど

消息のはしにありけれバ

返しにはあらねど認めおくる

難波（橋の字略す＝原註）津ニさくや昨夜この花大困り

いまはおばけをさくや遊この花

十四表

右は十五朝の作なるべし

十三表の詞書の「弘」は、「惟弘」が柳北の本名であるから、柳北を指す。柳北の三首の次に「消息のはしにありければ」とあるので、十五表までは手紙の遣り取りで詠まれた歌である。十四表で「右は十五朝の作なるべし」と甫周が記しているので、月見の会は十五日の早朝でお開きとなったようだ。となると、①②の月見の会と同じ会であることが判明する。おそらく会は柳北邸であり、客が帰った後に柳北は三種の歌を読み、甫周宛の手紙の端に記したのであろう。ところで、柳北の三首の月を詠んだ歌は、どこか物寂しげで、「兎角にこころなくさめがたくこゝろ覚ゆれ」と柳北は書きつけてあるが、それに対して「返しにはあらねど」とおくった「難波津」の狂歌は甫周の作である。さらに甫周と柳北の和歌の応酬が記載されている。早樹は甫周。たがその（誰園）は柳北。

早　樹

ますらをが袖ぬらしけりうぐひすの羽風やつらきむめの朝露

又消息のはしに

深き心ありてよめる　たがその

さけバちるならひをしりて今しばし

つぼミながらにほふむめがゝ

返事のはしニ　早　樹

十四裏

さきつころ、或る人の小とくてふいへるたハれ女と深くむつみかたらひしことありける、ほどもなくて秋風のふきたるにや、花の色香のうつろひて、うとくぞなりゆきたりき。又此頃ある人の物おもひニ深くしづませ給ふあまり

さけはバ散るならひをしりて今しばし

十五表　つぼミながらにゝほふ梅がゝ

と消息のはしにしるしておくられけるを、なに心とはしられねど、あれやこれやのことどもいろいろにおもひはかりてよめりける

さきてとくうつろふ花のためしあれば

つらきうちこそたのしかるらめ

十五裏

おふくろは亀のこうよりとしのこう

③　題しらず　よみ人しらず

敷島の大和にはあらぬ唐あやの怪しき物はえにし也鳧（けり）

眞砂地の月に一夜を明しては高根の雲を如何見るらん

假にだに渡りも敢ぬ橋の名のいつみき迚かなき名立覧

秋のよの長々しよを始にて幾よろづ代と契りそむらん

語注　○唐あや＝唐綾。中国から伝来した綾。綾を浮織にしたもの。○真砂地＝まなごつち。砂地。まなごじ。○迚＝とて。

評釈　作者未詳。「敷島の大和にはあらぬ」の歌の本歌は、「敷島や大和にはあらぬ唐衣ころもへずしてあふよしもがな」（古今集６９７番・紀貫之）か。「真砂地の月に一夜を」の本歌は「紫の名高の浦の真砂地袖のみ触れて寝ずかなりなむ」（『万葉集』一三九二）か。「仮にだに渡りも敢へぬ」の本歌は「みかの原わきて流るる泉川いつみきとてか恋しかるらむ」（『新古今集』恋九九六・中納言兼輔）「秋の夜の長々しよを」の本歌は、「あしひきの山鳥の尾のしだり尾のなが

ながし夜をひとりかも寝む」（『拾遺集』巻十三・柿本人麿）か。この四種の和歌は、「随身巻子」にはない。

④　同じ折に　　よみ人しらず

そことなくうかれありきて八百日行く
はまの眞砂地ふみみつる哉

八百日行濱の眞砂地ゆき返りみれどもあかぬ月の影哉

語注　○八百日（やおか）行く＝非常に多くの日数をかけて行く。本歌は万葉集四・五九六「八百日往く浜の沙（まなご）も吾が恋にあに益（まさ）らじか沖つ島守」（笠女郎が大伴家持に宛てたという）。歩き切れないほどの長い浜の砂を全部合せても、私の恋の果てしなさにはかなうまい、沖の島の島守殿。

評釈　「随身巻子」十二裏には

題しらず　　よみ人も

八百日行濱の真砂路ゆきかへりみれどもあかぬ月のかげかな

二首目の歌のみが記載されており、一首目は無い。ただし、⑤の歌が詞書なしで、この題しらずの歌につづいて記載され、書体、墨色も同じで、つづけて書かれたと思われる。となると、よみ人は⑤と同じ春三か。③の二首目「真砂地の」の歌との関連があれば、③の作者も春三ということになる。

⑤　新詞一曲。自楊臥孟贈晴蓑翁。
新詞一曲。楊臥孟より晴簑翁に贈る。

愛簟（アイコ）〳〵で勝負がつかぬハンヨ
はやく勝負がノー新サン
附ばよい、モ子ーガナイヨ〳〵

語注　○楊臥孟＝柳河春三のこと。○晴簑翁＝甫周のこと。○愛簟＝簟は竹の意であるから、竹を愛するで、甫周がお竹に想いを寄せていることであり、甫周の擬名でもある。それに引き分けを意味するアイコを掛ける。○新サン＝前出の新右衛門で甫周をさす。○モ子（ね）ー＝マネー。

評釈　甫周が芸妓のお竹にぞっこんなのは周知の通りだが、いかんせん甫周は手元不如意で、先立つものがない、掻靴痛痒の趣。そこを春三は都々逸に仕立て、軽妙にからかう。「随身巻子」十二裏の同

じ作には前書がない。かわりに「奇絶妙絶」の評語あり。これは甫周のものであろう。自分のことをこれだけ揶揄されているのに、「奇絶妙絶」と受けているところが、仲間内の洒落た楽屋落ちである。

⑥　題しらず　　よみ人しらず

難波津にさくやこの花大困り今は早いとさくやこの花

語注　○難波津に＝本歌は「難波津に咲くやこの花冬ごもり今は春べと咲くやこの花」（『古今集』仮名序）。

評釈　②に記したように、作者は甫周である。難波津は前出の「随身巻子」十三裏には「難波（橋を略す）津にさくやこの花大困りいまはおばけをさくやこの花」、とあって、難波橋の橋を略したと注記している。巻之一の⑰に、「いせの海難波の橋の河風に友まどはせて千鳥なくなり」とあるところから、難波橋近くで昨夜、この花に見立てた馴染みの芸妓に柳北が会ったのであろう。なお難波橋について『柳橋新誌柳編』の冒頭に「故柳橋の正称は難波橋と曰ふ」とある。十三裏では、「今は早い」が「今はおばけを」、とあるが、「おばけ」は顔が異常に長かった柳北の仇名である。②の評釈で紹介したように、柳北と甫周の手紙の遣り取りにある狂歌であり、その経緯はすでに述べた。

⑦　遁甯内外に叱られたりときゝて　　油　新

おふくろは龜の甲より年のこう

語注　○遁甯＝未詳。○「随身巻子」十五裏の同じ句には、前書きはない。この句の次に十六日（慶応元年九月）の日付の記事がある。○油新＝新が新右衛門のことであれば、甫周か。

評釈　前後の事情が未詳のため、理解に苦しむ。

⑧　ある人によみて贈りける

咲けばちる習ひときけば今暫し苔ながらに匂ふ梅が香　　むさし野の花子

語注　○むさし野の花子＝「随身巻子」十四表には同じ歌の作者が「たがその」とあり、柳北である。○ある人に＝十四表では柳北と甫周の手紙の遣り取りの中で詠まれているので、ある人は甫周である。○習ひときけは＝十四表は、「ならひをしりて」。

評釈　十四表では、詞書が「又消息のはしに」とあり、さらに「深き心ありてよめる」となっている。その消息の宛先は甫周であり、「返

事のはしに」として「早樹」の名で、⑨の長い詞書をつけた歌を返している。

⑨　さきつ比ある人の小とくといへる乙女と。深くむつみ語らひしことのありけるに。ほどなくて秋風のふきたるにや。花の色香のうつろひて。疎くぞなりゆきたりき。又この比ある人の物思ひに深くしづみけるあまり。くさ〴〵のこと消息のはしにかきておくられしを。なにごゝろとはしられねど。あれこれのことども。思ひはかりてかくはよみ侍る

早　樹

さきてとく うつろふ花のためしあれば
つらきうちこそ楽しかるらめ

語注　○乙女＝「随身巻子」十四表では「たはれ女」（あそびめ）となっている。）○疎＝疎の俗字。○くさ〴〵さのこと云々＝「随身巻子」十四表では、「くさぐさ」以下はない。

評釈　⑧の「ある人によみて贈りける」と、⑨のこの長い詞書をもった歌とは関連がある。⑧の手紙への返書を甫周が贈り、そこに長い詞書をもった歌を記した。十四表では「返事のはしに」と前書をつけている。それを後日、柳北は「伊都満底草」に書き留めた、というのが経緯である。⑧の歌で柳北が梅の苔に仮託した女が、小とくという「たはれ女」であることが、判明する。詞書で「小とく」と「疎く」、歌で「とく（早くの意）うつろふ」と掛詞が散りばめられている。

⑩　過し夜寐覺の早樹と酒くみてくさ〴〵の物語りしける折。いづこより歟いと白く清らかに見ゆる人の来りて。いと心うき立たるさまにて。走り廻りければ。おことはいづ地へまかると問しに。われこそ唐（モロコシ）へ行て綾きぬ買ひ得んと思ひ立れぬといひしさま。いとゆゝしくはた珍らしくなん覺えければ。かくよみて早樹におくりける

誰そのゝあるじ

逢見んと思ふ物からあやしくもみがき出たる月の俤

西の國にも千六百年のころより後にはかゝるめづらかなることは少なかるべしと覺ゆる

語注　○からあや＝唐綾が詠みこまれている。○みがき出たる＝「みがき」は「磨き」か。「磨く」には、絹地に糊をしみこませて乾してから、砧で打った打物の表面を貝殻でみがいて艶を出すという用例がある。唐綾から「磨き出たる月」が導かれている。○西の国＝唐綾を詠み込んでいるので、唐土を指すか。○千六百年のころ＝未詳。

評釈　「白く清らかに見ゆる人」とは、柳北が幻夢のうちに見たのであろう。「おことはいづ地へまかる」と尋ねると、「唐へ行て綾きぬ

買ひ得んと思ひ立れぬ」と答えたというのだが、柳北には外にも梅の精に出会ったとする作例がある。③の「敷島の大和にはあらぬ唐あやの怪しき物はえにし也鳧」の歌がすでにあり、「逢見んと」の歌につながっているようだ。

⑪　新詞一関寄新右

新詞一関、新右に寄す　　可愛叟

愛篁（アイコ）〳〵で勝負が附かぬ（ハンヨ）
つけばむかふのノー　新サン
手がしれる。ウマミハナイヨ〳〵

語注　○一関＝けつ。一曲に同じ。○新右＝新右衛門で新サンに同じ。甫周のこと。

評釈　⑤の春三の都々逸に、柳北が横から口を出した態の作である。甫周とお竹との関係に、こういう男女の仲はあまり深入りするな、あとで相手の手の内が分ってしまえば、面白味がないではないか。ほどほどにしておけと忠告する。

⑫　代レ虱寄二晴蓑郎君一　　虱に代り晴簑郎君に寄す　　無名氏

此身久在二鶴毛衣一　　此身　久しく鶴毛衣に在り
願子去時帯レ妾歸　　願くは　子去る時　妾を帯びて帰れ
他日春場探レ勝夕　　他日　春場　勝を探るの夕
移栖（リマン）柳下小仙扉　　移り栖まん　柳下の小仙扉

語注　○晴簑郎君＝甫周のこと。○無名氏＝柳北か春三か。○鶴毛衣＝鶴はお鶴という芸妓か。○柳下小仙扉＝柳は柳橋、下はほとり。柳橋の辺りを指すか。仙扉は仙境の入口ということで、柳橋の花街であろう。

⑬　早樹に贈る　　鶴濱女史

つぶす間にうれしきよるのしらみけり

語注　○つぶす＝虱をつぶす、と時間をつぶす。○しらみ＝虱と空が白んでくるを掛ける。

⑭　返し　　早樹

しらみ行く床にもゆかし鳥の聲

評釈　⑫⑬⑭と虱の作が続くが、「しらみ」は芸妓の仇名ではないか。

⑫と⑬はともに甫周宛になっているが、「無名氏」と「鶴浜女史」は別人で、このような狂詩や狂句を甫周とやりとりするのは、柳北と春三なので、無名氏が柳北、鶴浜女史を春三とみる。⑭の「鳥」は、三人の馴染みの芸妓のお鳥である。このときは、たまたま甫周がお鳥と共にいられる役まわりとなったので、柳北と春三がやっかみ半分の当てつけをした、といったところか。

⑮　夜泊二香港一。月色清瑩。追二想舊遊一。不レ堪二感慨一。賦二一絶一。寄二誰園子一。　多喜児

夜、香港に泊る。月色、清瑩たり。旧遊を追想すれば。感慨に堪へず。一絶を賦して。誰園子に寄す。

幾回旅魂繞二澪川一　幾回か　旅魂　澪川を繞る
去年行楽夢茫然　去年の行楽　夢茫然
得レ涼有レ恨三千里　涼を得て恨有り　三千里
孤負楊梁月下船　孤負す　楊梁　月下の船

語注　○多喜児＝幕臣・水品楽太郎。○清瑩＝明るく澄みわたっていること。○孤負＝そむく。違背する。○楊梁＝柳橋。

⑯　漫喰　漫に喰む

梅川美酒柳橋月　梅川の美酒　柳橋の月
風味風光人不レ知　風味　風光　人知らず
江左蕭郎行萬里　江左の蕭郎　行くこと万里
風流今日屬二阿誰一　風流　今日　阿誰に属す

右在二本年七月十七日書牘中一。多喜子七月六日達二于馬耳塞一。十七日入二巴黎府一。云々。　誰園生記

右は本年七月十七日の書牘中に在り。多喜子七月六日馬耳塞に達す。十七日巴黎府に入る。云々

語注　○漫喰＝喰は口ずさむ。そぞろに口ずさむ。○梅川＝柳橋の料亭。広重の『江戸高名会亭尽』に「両国柳橋　梅川」の図あり。○江左＝中国・長江の下流域、江蘇省、浙江省のあたりを指すが、ここでは隅田川の周辺のこと。○蕭郎＝色男。ここでは、柳橋界隈に出没していた水品のこと。○馬耳塞＝マルセーユ。○巴黎府＝パリ。

評釈　巻之一の㊴㊵、巻之二の⑯に関連する。この時、水品は二度目の外遊中でパリにいた。すでに紹介したように、⑮⑯は慶応元年七月十七日付の水品より柳北に宛てた手紙の中にある七言絶句である。⑮は香港に寄港した折りが満月で、一年前の柳橋の楽しかった行楽を思い出して感慨にふける水品の心境を詠う。⑯は風流子を気取っている水品も、異国にあっては如何ともしがたく、オレの代り

は誰なのであろうと思いつつ、柳橋の遊興を偲んでいる。

⑰　月の歌よみけるなかに　　唯　好

墨田川三年の夢と成にけり小舟さしつゝ月をみしよも

評釈　文久三年に屏居となって以来三年になる。隅田川で月見をしたのも、遠い夢となってしまった、という柳北の述懐。

⑱　ある女の。さるかたにことづてすべきことの侍れど。人にはすゝむべき。みそか事に侍れば。君ならでたのみきこゆべき人あるべくもあらず。さればいく野の道遠けれど。いな舟のいなみたまはで。あゆびはこび給ひてんやと。いひければとりあへず　　きのよしまろ

大任を引受ける氣はなけれども
ギル（Girl　or　Gelo）の用ならゆかざなるまい
或評云。仙客集中多二此類一。蓋空中一樓閣耳。

語注　○みそか事＝他人に知られたくない秘密。男女の人目を忍ぶ情事。○いく野の道遠けれど＝金葉雑上・五四三「大江山生野の道の遠ければまだふみもみず天の橋立」（小式部内侍）。○いな舟のいな＝『古今集』東歌・一〇九二「最上川のぼればくだる稲舟のいなにはあらずこの月ばかり」から、否を引き出す慣用句。○あゆびはこび＝歩み運び。○きのよしまろ＝柳河春三。○空中一楼閣＝空中楼閣。根拠の無い架空の物事。

評釈　女の頼みとあれば、何はさておき、やってやろうじゃないか、と男の鼻息までが聞えそうな狂歌。評をつけたのは柳北であろう。こうした類いの狂歌を春三はよく作るが、所詮、絵空事なのサ、という。

⑲　獨唸　　可愛叟

目の上の蚊をとつて鵜をつかひたし

語注　○独唸＝独りごと。○可愛叟＝柳北。

⑳　題しらず　　よし麿

人心常なきものとしりながらあやしく末を契るなり鳧
ますら男と思へる我も心からあやなく迷ふ戀の道かな
我ながら危ぶまれ鳧踏みわくる戀の山路の果をしらねば

自註云。第三首近來之秀歌と自賛す

又云。オバサンノコトハオモヒキリマスヨ

語注　○よし麿＝春三。○常は芸妓のお常か。

㉑　亀子に代りて

春　影

忘らるゝ身をうらしまが玉手箱明暮に唯物をこそ思へ

語注　○亀子＝芸妓の名か。○身をうらしま＝身を恨むと浦島を掛ける。『拾遺集』恋四・右近「忘らるる身をば思はずちかひてし人の命のをしくもあるかな」。○玉手箱明暮に＝玉手箱を開けると明け暮れを掛けるか。○唯＝唯好（柳北）を暗示するか。

評釈　玉手箱を開けて遠いところへ行ってしまった浦島さん。少しは私のことを思い出しておくれ。浦島は柳北を暗示するので、亀子に代って詠んだという態にしている。

㉒　人に代りて思をのぶ

よ し 麿

誰爲の操みすらんなよ竹のなびきながらに下折もせぬ

此歌を書きし紙に竹の圖あり。末に云。愛篁山人羅在中。寫于此君園。新　竹

語注　○なよ竹＝なよなよとした竹。甫周の愛人お竹をさす。○下折＝草木の枝などが折れて垂れること。○愛篁山人＝甫周。○羅＝薄絹。

評釈　「人に代りて」の人はお竹か。誰のために操を立てているのであろう。他の男になびきそうに見えて、やはり甫周一途なのだ。新と竹が□で囲まれているので、新は甫周を、竹はお竹をあらわす落款印である。

㉓　録舊製

旧製を録す

臥　孟

路畔春風一樹梅
黄昏月下數枝開
餘香留在吟人手
勾引千言萬句來

路畔の春風　一樹の梅
黄昏　月下　数枝開く
余香留りて　吟人の手に在り
千言万句を勾引し来る

題此詩之箋有梅圖。末欵云。羅山處士寫于浪華之香雪書房。三　浦

此の詩を題するの箋に梅図有り。末に款して云ふ、「羅山処士、浪花の香雪書房に写す」と。

語注　○臥孟＝春三。○梅＝芸妓お梅を詠み込む。○羅山處士＝未詳。

○香雪書房＝未詳。香雪校書で後出。

評釈　三と浦は落款印で、三は春三、浦は甫で甫周か。とすると、羅山処士は甫周か。

㉔　次二臥孟第一世韻一　　臥孟第一世の韻に次す

臥孟第二世亦係賜號

無情莫レ折雪中梅　　無情　折るなかれ　雪中の梅
芳蕾欲レ開猶未レ開　　芳蕾　開かんとすれども　猶未だ開かず
好是高人有二餘趣一　　好し是れ　高人に餘趣有り
吟衫領二得暗香一來　　吟衫　暗香を領得し来る

語注　○臥孟第一世＝春三。第二世は甫周。○次＝㉓の春三の詩に、甫周が次韵している。○梅＝原文は海。誤植であろう。○吟衫＝詩人の衣服。○高人＝世俗に超然としている人。○領得＝自分のものにする。○暗香＝どこからともなく漂ってくるよい香り。

評釈　春三と甫周は時に臥孟一世、二世。藐姑射仙人一世、二世として歌や詩を詠んだ。㉓と㉔は綻びはじめた梅の花を賞する詩の応酬であり、同時に芸妓のお梅の色香をたたえている。

㉕　記事

梅花無レ色鳥無レ聲　　梅花に色無く　鳥に声無し
知否仙郎此夜情　　知るや否や　仙郎　此の夜の情
何料深山荊棘裏　　何ぞ料らん　深山　荊棘の裏
喈々聽得鳳雛鳴　　喈々　聴き得たり　鳳雛の鳴くを

岐山處士

語注　○岐山處士＝岐山（中国陝西省の山名）は鳳凰山とも称され、岐山と鳳凰は縁語。詩の内容から幽居中の柳北か。○荊棘＝いばら。未開の地。○喈々＝鳥の鳴く声。鳳凰の鳴く声。○鳳雛＝鳳凰の雛。転じて優れた少年のたとえ。まだ世に現れない英雄のたとえ。

評釈　作者が柳北とすれば、幽居中の身の上を踏まえつつ、世に出る日を待ち望む意気を示している。

㉖　十月初二夜愛篁書屋席上醉題

十月初二夜、愛篁書屋の席上にて醉つて題す

誰呂園

自訝一杯清興加　　自ら訝る　一杯　清興の加はるを
野梅移在二主人家一　　野梅は移りて主人の家に在り
何圖三歳幽居客　　何ぞ図らん　三歳　幽居の客
此夜此亭看二此花一　　此の夜　此の亭　此の花を看る

先生今日落二風塵一　　先生　今日　風塵に落つ
歡語慰レ吾能幾人　　歡語　吾を慰むるは能く幾人ぞ
獨有二禽兒好音在一　　独り禽児の好音の在る有り
一聲聲作滿堂春　　一声　声は作す　満堂の春

語注　○愛篁書屋＝甫周の邸。○臥孟第二＝甫周のこと。○十月初二夜云々＝「随身巻子」二十一表に次の記載あり。

「二日　晴　愛篁亭招飲校書羅浮在坐書以贈　多情生誰園（愛篁亭で会合があり、芸者の羅浮（お梅のこと）も同席した。その場で詩を揮毫し、贈った。）」と詞書があって、同じ七絶二首があるが、作者が多情生誰園（柳北）となっている。続いて出席者の名前が記載されている。「誰園箕作福沢柳河楠山來梅鳥倍従」とあって、メンバーのほかに、芸妓のお梅お鳥の二名が陪席していた。この会合は、柳北が歩兵頭並に幕府より抜擢され、三年に及ぶ幽居が解けたことを祝う会であった。○訝る＝疑いあやしむ。○清興＝せいきょう。上品で風流な楽しみ。○野梅＝お梅をさす。○主人の家＝甫周邸。○「随身巻子」二十一表では二首目の第二句「能幾人」→「有幾人」、第三句「獨有禽児」→「獨愛禽児」とある。○風塵に落つ＝復職すること。○禽児＝芸妓のお鳥を指す。○好音＝お鳥の唄う声音。

評釈　㉖の詩の作者は「臥孟第二（甫周）」とあるが、「随身巻子」では「多情生誰園（柳北）」とある。会合の目的、詩の内容から作者は、柳北とするのが妥当である。「随身巻子」二十裏には次の記載がある。「廿八日　成島歩兵頭並被仰付候ニ付參リ其夜奇事あり云々」とあるので、慶応元年九月二十八日に辞令がおりたのであろう。つづいて「廿九日　大雨　柳河神田楠山ト同勢樓へ上る　その夜又奇事云々　文鳥倍従」とあって、柳北抜きで騒いだようである。そして、十月二日が甫周邸での祝賀会となるのである。さらに「七日　曇　金田同行にて出懸ケ　於玉か池にてわかれ　夫より和泉橋へ參ル　柳河神田楠山來」とあって、柳北の慶事を祝う仲間の動きが頻繁である。いずれにしても、柳北が歩兵頭に抜擢されたことは、陸軍の西洋式再編を急ぐ幕閣が、洋学者達の力を頼みにせざるを得なくなったことを示しており、今泉氏は「西洋文化の移入を主張してきたグループの勝閧ともいえる（今泉、前掲書）」と、洋学者達の祝意を評価されている。

㉗　早樹のもとへ遣しける　　春影

手枕の夢にきゝつる鳥が音は覺ての後も戀しかるらん
返しは鸚鵡かへしにてかりけりとあり

語注　○鸚鵡返し＝和歌で、人から言いかけられた歌の文句の一部を変えて直ちに返歌すること。○鳥が音＝芸妓お鳥の声音。

評釈　「随身巻子」二十二表、二十二裏の記載。

五日　曇　誰園より文通　七日晴天ならば六湟へ参ル　同行可致旨返書出ス　柳河ト辰次郎へ文通　夜に入　秋水への返書認

六日　陰晴未定　神田柳河へ文通　午後誰園より文通　金田來泊

とある下方にこの歌が記され、小文字で「鸚鵡かえしこひしかりけり」とあって、さらにもう一首が記されている。六湟は六間堀で、甫周の弟藤沢志摩守の邸。辰次郎は甫周の弟甫策。秋水は宇都宮三郎。頻繁な手紙のやり取りが目立つ。この歌は詞書によると、春三から甫周への手紙に付けられていたものだが、甫周が六日に春三に返書を出したとき、鸚鵡返しの歌にすぐさま「こひしかりけり」とした。春三の歌を評した柳北は「かりけり」とのみ記載している。

㉘　だいしらず　　よみ人も

靡くべき人こそ見えね橋の名も我名も同じ柳なれども

語注　○よみ人＝「我名も同じ」とあるから、柳北であろう。橋の名は柳橋である。

㉙　臥孟二世に贈る　　よみ人しらず

からい世に千石とりし御手際は
うめへもんだと人もいふ也

語注　○よみ人＝臥孟二世と甫周を呼べるのは、命名者である一世の春三以外にはありえない。○からい世＝世知辛い世。○千、とり、うめ＝この席にも三人の芸妓がいた。○千石＝柳北の「澤上隠士傳」には「二十九の秋、突然歩兵頭並に擢（ぬきん）でられ、家になかりし千石の禄を賜ふ」とある。

評釈　代々奥儒者の成島家は三百石高、御役料二百俵扶持の待遇であったから、成島家にとっては破天荒の待遇であった。春三も甫周も心から祝意を示したものと思われる。さらに慶応四年、会計副総裁に就任した柳北は、三千石の待遇であった。

㉚　川柳よみけるうち　　早　樹

○○○どうしたか亀がこうらをすりむいた
○○茶をひけばざうきんさすや閑こどり
○あんまとはさて〳〵いとしうめの花

○竹の子はやがてはへるか地のわれめ
○○八の字をよせてしげ〳〵水をあび
○二階から櫛の齒をひく文づかひ
○○外國へうれる線香ちとつまり

近來の大出來感服感服　　臥孟第二妄評

評釈　この川柳と同じものが、甫周の手控「雲にかけはし」一表にある（今泉源吉・前掲書三〇二頁）。但し「二階から」の川柳がない。早樹も臥孟第二も甫周であるから、評は自画自賛というところか。

㉛　題しらず　　早樹

野邊に生る千草の中の蔦紅葉時雨してこそ現れにけれ

評釈　㉚と同様、「雲にかけはし」十表に同じ歌がある（今泉源吉・前掲所三一三頁）。

㉜　呈二誰園先生一。奉レ賀二榮轉一。且博二先生一粲一。　　喫霞小僊

誰園先生に呈す。栄転を賀し奉り、且つ先生の一粲を博す

丹鳳啣レ書夜入レ夢　　丹鳳　書を啣へ　夜　夢に入る

閑人忽作二忙中人一　　閑人　忽ち忙中の人と作る
従レ此紅桃白梅底　　此れより　紅桃　白梅の底
阿誰占斷柳橋春　　阿誰　占断す　柳橋の春

語注　○喫霞小僊＝春三のこと。○一粲＝ひとたび笑う。粲は清く白いことで、白い歯を出して笑う意。○丹鳳書を啣へ＝めでたい鳥が天子の詔を啣え。丹鳳は天子の詔を下達する使者。○紅桃白梅底＝底はところを意味する助辞。いわゆる紅灯の巷。

㉝　神無月ばかり。約ありて早樹を待ちけるに。雨の降出にけるを恐れにけるにや。さはる事の侍りけるにや。ほど過て來ざりければ申遣しける　　紫老

言のはの花の盛をとはぬかな竹の林や世をへだつらん

語注　○神無月＝旧暦十月。○竹の林＝㉞も「竹の林」で応答しているところから、甫周の愛人である芸妓のお竹にかこつけた応酬にちがいない。紫老は春三であろう。

㉞　かへし　　はやき

照月に雲の隔てのなかりせば竹の林のいかでさゝへむ

㉟

久方の桂のかげにかゝる雲こよひ何處の雨となるらん　　鳥子

語注　○鳥子＝芸妓のお鳥示すが、春三が名前を借りているかもしれない。○桂＝月の異称。

㊱　かへし　　早樹

雲となり雨となりてもいぬべきを身にいたつきの入しばかりに

語注　○雲となり雨となり＝楚の懐王が高唐に遊び、夢の中で巫山の神女と契ったが、神女が立ち去るときに、朝には雲となり、夕には雨となってここに参りますと言ったという「巫山の故事」に拠る。○いたつき＝労、病。苦労、病気。「いたつき」と「つき（月）の入し」が掛けられている。

㊲　　春影

玉章の契違ふとしらませばかねても人を待ざらましを

語注　○玉章＝たまずさ。手紙。

㊳　かへし　　早樹

昨日けふ思をこめし玉章の仇にならんとあに思ひきや

㊴　　よみ人しらず

ふりいづる雨におそれて來ぬ人は
ものぐさ（物草　懶惰）とこそいふべかりけれ

㊵　かへし　　早樹　淇園女史賜副號物草太郎

雨風を恐れて出ぬ折もあり妹にあふてふ事のなければ

語注　○淇園＝竹の異称。中国河南省淇県の北西の地。竹が多いことで知られる。芸妓のお竹を指す。お竹さんから、私（甫周）の副号として物草太郎をいただいた。

評釈　㉝から㊵の歌と返しは、男を待つ女の、男へのうらみつらみの歌と、男の返歌になっている。㉞、㊱、㊳、㊵の作者はすべて早樹（甫周）であるから、相手の女も同一であると思われる。となると、

お竹以外にありえない。お竹であることは、㊵の「かへし」の詞書に「淇園女史」とあることで、判明する。しかし、お竹の名は使われておらず、㉝、㉟、㊲、㊴の作者名は四人とも違う。実は春三が「紫老」「鳥子」「春蔭」「よみ人しらず」を使い分けているのである。要するにお竹の代りに春三が呼びかけ、甫周が答えるという、歌の応酬である。ところで、㉝に始まる歌と返しは、「随身巻子」二十九表から三十表までにすべて記載されているが、歌の並べ方が異なる（ちなみに今泉源吉・前掲書にはこれらの歌を採り上げていない）。二十九表に四人の詠み手の問いかけの歌が、次のようにまとめられている。但し、「玉章の」の作者が「よしま政」となっており、柳北が㊲の作者を春影としていることで、「よしま政」は春影であることが判明する。そして、二十九裏には、甫周の「かへし」が宛名をつけてまとめられている。

二十九表「伊都満底草」との異同は（）内に示す。

寝覚の早樹大人にちぎりおきけることの待りて日ひとひ夜をよまちあくがれてよめりける（神無月ばかり。約ありて早樹を待ちけるに。雨の降出にけるを恐れにけるにや。さはる事の待りけるにや。ほど過て來ざりければ申遣しける）　鳥　子

久かたの月の桂に（桂のかげに）かゝる雲こよひいづこの雨となるらん

言の葉の花のさかりをとはぬ哉竹のはやしや世を隔らん　紫　老

玉章のちぎりたがふとしらませばかねても人をまたざらましを　よしま政

降り出る雨におそれて來ぬ人はものぐさとこそいふべかりけれ　詠者不知

二十九裏

右の哥にて答のなければ其罪まぬがれがたしとありければ（この詞書きは無い）

答

よしま政君

きのふけふおもひをこめし玉章の仇ニなるとはおもハざりしを（仇にならんとあに思ひきや）

鳥子の君に

くもとなり雨となりてもいぬべきを身にいたつきの入しばかりに

紫老の君に

てる月に雲のへだてのなかりせば竹のはやしのいかでさゝへむ

今一人りの御方へ

あめ風をおそれていでぬこと（折）もあり妹にあふてふことの

なければ

㉝から㊵までの歌は、「随身巻子」の方に先に記され、後に柳北が「伊都満底草」において、再構成したとするのが妥当である。

㊶　ある日唯好ぬしのもとに。れいの人ども具してゆくべきよし。かねてちぎりおきけるに。やむをえがたき事の侍りければ。第二世なる箱屋のもとへ申遣ける

玉くしげ二人にひとりゆかなくば　　藐姑射一世仙人
はこやの役が濟まぬとぞおもふ

語注　○れいの人ども＝洋学者仲間に馴染みの芸妓たち。○第二世なる箱屋＝第二世藐姑射仙人の「藐姑射」を箱屋にした。箱屋は三味線を箱に入れて芸妓のお供をする男衆。ここでは甫周のこと。○玉くしげ＝美しいくしげ。くしげは、櫛や化粧の道具を入れておく箱。ここではくしげの蓋の意で、「ふた」と同音を含む「ふたり（二人）」にかかる。

評釈　柳北邸に芸妓達を連れて、遊びに行くはずが、春三の都合がつかず、甫周に「同じ藐姑射（箱屋）同士ではないか、よろしく頼むヨ」と言づてしたということ。

㊷　早　樹

右左おもひのまゝに別れてもとけて又あふゆきの呉竹

評釈　「随身巻子」三十表に

題しらず　　詠み人も

右左りおもひのまゝにわかれても解て又あふ雪の呉竹

とあるが、前記㊵の歌の次に同じ書体で記されているところから、㉝から㊵の歌と返しの応酬を踏まえているようである。すなわち、「呉竹」は芸妓のお竹を暗示しているので、㊷の歌は、いずれまたお目もじいたしましょうという挨拶であろう。

㊸　題しらず　　よみ人しらず

又見べき時し知らねば我袖に匂をとめよ野路の梅が枝

評釈　藤原定家『拾遺愚草』に「宮人の袖にまがへる桜花にほひも留めよ春の形見に」がある。作者は誰であろう。梅の花を好む柳北か。

㊹　新曲一閑。述香雪校書之意。

新曲一閑。香雪校書の意を述す。

「おまへ油といはんすけれど。ァイョわたしやうしろへノウ竹チヤンにげまする。賣た事はナィショ〳〵

「藝者する身は苦しいものよ。油かけても眞にされる。

語注　○一閑＝一曲。○香雪校書＝未詳。お香、お雪と二人の芸妓か。㉓に香雪書房がある。○竹チヤン＝未詳。○油＝（火に油をかけるとよく燃えることから）おだてること、おせじ、へつらい。○油かけても＝油掛ける、油を言う。

評釈　俗謡つくりの上手い春三の作であろう。

㊺　題畫應某先生囑　　題画して某先生の嘱に応ふ　　臥孟

針刺燈邊一滴油　　針刺　燈辺　一滴の油

楓橋流去漂全舟　　楓橋流れ去り　全舟漂ふ

蕭郎近日舊裝改　　蕭郎　近日　旧装改まり

老懶無心漁海鰍　　老懶　海鰍を漁する心無し

註云、漁音御、漁色之漁、

註に云ふ、漁の音は御、色を漁るの漁なり

語注　○楓橋＝蘇州郊外にある橋。唐の張継「楓橋夜泊詩」で知られる。○蕭郎＝夫あるいは恋人。また色男。○海鰍＝セミクジラ。くじらというあだ名の芸妓がいた。○ワルヒス＝Whalesか。

評釈　某先生は甫周をさしている。これまでの芸妓お竹と甫周の関係を揶揄してきた春三が、金も力もない色男の甫周に、そろそろ手を引いたらどうだと、暗にほのめかしている。

㊻　佳人輩によみて贈りける　　きのよし麿

梅香も懐しけれど翼なき鳥にも似たる身をいかにせむ

語注　○佳人輩＝馴染みの芸妓たち。○きのよし麿＝春三のこと。

㊼　浦島ぬしへよみておくりける　　あき子

思へども何しか人のとはざらむ

あきといふ名を君や負けむ

註　來春は官位のすゝむとさ云々

語注　○浦島ぬし＝柳北。○あき子＝未詳。○何しか＝どうしてな

のか。○あきといふ名を君や負けむ＝「名に負ふ」の形で、持つ、備えもつ。

評釈　このところ、ちっともいらしてくださらないけど、私の名前があき子だから、もう飽きたとおっしゃるのかしら。註は、そうかもよ。年が明けたらご栄転だそうだから。これも作者は春三ではないか。当然、柳北の歩兵頭並任官を踏まえている。

㊽　同じこゝろを

時しあれば浮木も亀にあふ物を
われのみ人を見るよしのなき

あ や 子

語注　○あや子＝未詳。○浮木も亀にあふ＝盲亀の浮木。海中から百年に一度しか浮かび上がってこない盲目の亀が、海面に首を出した時、流れ漂う浮木の一つしかない穴に首がちょうどはいるという。雑阿含経、涅槃経などにある話。

評釈　これも春三の作であろう。

㊾　かつら男へ

かつら子　一名政子

かつら木の峯の棧一夜にて中たえんとは思はざりしを

語注　○かつら男＝月に住む男。美男子。具体的には甫周を指す。姓が桂川で、号が月池、そして実際に美男であった。○かつら子＝未詳。一名政子でよしま政の春三か。○かつら木の峯の棧＝次の伝承を踏まえる。昔、役行者の命で葛城山と吉野の金峯山との間に岩橋をかけようとした一言主神が、容貌の醜いのを恥じて、夜間だけ仕事をしたため、完成しなかったということから、恋愛や物事成就しないことのたとえや、醜い顔を恥じたりするたとえにされる。実際、春三は醜男であった（前出）。

評釈　急に冷たくなった甫周への女の恨み言を、春三が代わりに詠んだというところであろう。

㊿　臥孟第一世方今嚢中一空に付。職掌を浦島に譲らんと乞出たり。され共浦島は亀にのみこゝろうかれて。この職掌を固辭するなれば。矢張臥孟一世の再職いたさるゝ方。人心の折合よろしくと存じ。かくよめりける

これからの拂は暮の玉手箱ふたゝび君が勤めたまへや

語注　○臥孟第一世＝春三。○嚢中一空＝財布が空っぽの意。○職掌＝当時の春三の職掌は、開成所教授であったが、この場合は財布

が空だから、支払役を変ってくれといった意味の職掌であろう。○浦島＝柳北を指す。○亀＝芸姑のお亀か。○玉手箱＝箱の蓋が、ふたゝびに掛かる。

㊿　題しらず

義理でかためた浮世に生れぎりをかくのもぎりのうち

評釈　作者不詳。

52　十一月某日。誰園のもとより呼におこせけるに。病に臥したるよし申遣しければ。かさねて佳人の雅宴なれば推しても來れと消息ありければかへし

寂ざめの早樹

よしやけふやむとも出ん狩人の

とらでやむべき鳥ならなくに

P Says："I love all men, but love no tomas" on the contrary, Mr：N Says："I refuse all Women but love Cant"

語注　○英文の語＝Pはおそらくプラムで芸妓のお梅。tomasはトンマで、間抜けな男か。on the contraryは、前言を否定して、とんでもない。Nは柳北の姓の成島であろう。Cantは歌の意か。

評釈　柳北から甫周に、遊びにお出でよと手紙が来たが、病気なので断ると、今日はキレイどころを揃えているんだから、とにかくいらっしゃいと催促。そこで返し。おれが猟師であれば、病であろうと鳥を捕まえに出掛けていくのだが、肝心の鳥がいなければ出かけるまでもない。鳥は芸妓のお鳥か。英文の訳。お梅が言う「男はみんな好き。でも、トンマはいけません」。N氏が言う「女はみんなご勘弁。でも、唄はよござんす」。

53　かな川の驛を立出ける折よめる

唯　好

驛路も假ねながらに住馴て立離れうきけふにぞ有ける

語注　○かな川の駅＝神奈川宿。○駅路＝うまやじ。

評釈　歩兵頭並に任官され、柳北が横浜に赴任するのは、慶応元年の十二月である。遊山で郊外に足を伸ばすことがあったにしても、柳北が江戸を出て長期にわたる滞在をするのは、この時が初めてであった。この歌が、横浜赴任の際に詠まれたものかは、特定しがたいが、思いのほか滞在が延びたのであろう。「立離れうき」柳北の旅立ちとなったのであろう。

⑭　霜ふり月二十あまり四日のよ。よみてある人に贈り侍る

よみ人しらず

頼むべき神だにあらぬ戀なれど千代もと契る今宵也鳧

語注　○霜ふり月＝旧暦十一月。

評釈　慶応元年十一月二十四日という日付は、柳北の横浜赴任の直前である。よみ人は柳北で間違いあるまい。長期に江戸を留守にするわけであるから、恋しい女への惜別の歌である。ある人は側室のお蝶であろう。

⑮　思ふことありてよめりける

早　樹

波越て苦しき物は陸奥のいはねにおふるまつ身なる覧

評釈　『後拾遺集』恋四の清原元輔の「契りきなかたみに袖をしぼりつつ末の松山浪こさじとは」の歌を踏まえ、柳北の帰りを待つ女の苦しい心を甫周が代りに詠んだのであろう。

⑯　題しらず

春　影

有明の月もすみ田の舟床に花の香しめし袖ぞあやしき

語注　○月もすみ田＝月も澄むと、隅田川とを掛ける。

評釈　これも柳北の送別の船遊びで詠まれたものかもしれない。

伊都満底草巻四

①　だいしらず　　よみ人も

頼むべき神だにあらぬ戀なれど千代もと契る今宵也鳧

評釈　この歌は、巻三の⑭に前出重複。

②　女に代りて人の元に遣しける　　よしまろ

とりがねに心移して呉竹のもとのまがきを人や忘れし

語注　○とりがね＝鳥が音。鳥は芸妓のお鳥。○呉竹＝芸妓のお竹。○人や忘れし＝人は忘れたのであろうか。

評釈　春三が甫周の馴染みであるお竹に代って、くどきの歌を詠んでいる。

③　霜月ばかり病にこもれりけるをり

梅が香も鳥のいろ音もなき宿の
　まろがまろねをあはれともみよ

語注　○まろね＝帯もとかずに着物のまま寝ること。

評釈　②③の二首は『桂川の人々』298頁に柳河春三の自筆草稿「うしろ髪」の第六款として紹介されている。

呈
新詩　二章
乞
諸先生一粲　　孟臥

表書きは「新作が二首出来ましたので、先生方ご笑覧くだされ　臥孟」という意味。そして続いて二首の歌についての詞書きが記される。

此ウタハ古今三木三鳥伝授ノ内一秘歌也トゾ冷泉家秘説初句五字ともスミテヨムベシ　第三字ニゴルベカラズ云々

いかにも、ものものしく触れ込んであるが、無論、洒落である。

竹子にかはりて
人のもとに
鳥がねに　心うつして
呉竹の　もとのまがきを
とはぬ君かな
よみ人しらず

霜月ばかり病に
こもりけるをり　きのよしまろ
うめが香も　鳥の
いろ音もなき宿の
まろがまろねを
あはれとはみよ

語注　○一粲＝粲は笑いの意。お笑いくだされ。○古今三木三鳥（さんぼくさんちょう）伝授＝古今伝授のなかで、切紙によって伝授された秘伝。三木はおがたまの木、めどに削り花、かはなぐさ。三鳥はよぶこどり、ももちどり、いなおほせどり。

②③の歌の作者が春三であることは、以上の紹介で分る。また、②の「女に代りて」の女が、甫周の愛人のお竹であり、「人の元に」の人が、甫周であることも判明する。

④　人のもとに遣しける消息のはしに　よみ人しらず

有明の月もすみだの船床に花の香しめし袖ぞあやしき

評釈　前出の巻三の㊻の春影（春三）作と同じ。

⑤　題しらず　よし磨

君が名も誰か名も立ぬ戀。ならば結の神も嬉しからまし

語注　○結びの神＝本来は天地・万物を生み出す産霊神（むすびのかみ）であるが、男女の縁を結ぶ神と変化し、さらに俗にいう結びの神となって、男女の仲をとりもつ人を指す。

評釈　春三の作である。甫周とお竹の関係を明らかにし、恋を成就させよとせまる。結びの神は春三であろう。

⑥　早樹

嬉くも苦くもなく過ぬべし戀てふことの世になかりせば

評釈　⑥の歌は、⑤の歌への返しのように見える。⑥は「随身巻子」四十一裏にも同じ歌があり、また続いて四十二表に誰園（柳北）の、

僞（いつわり）をあだにうらみし昔よりまことをかこつ今ぞくるしき

の歌がある。ところで、「随身巻子」三十九表には「慶應二年丙寅正月元旦」と大書してあり、三十九裏以降の作は慶応二年のものであることが分る。また、『伊都満底草』巻四との重複する作が多い。

⑦　誰園

すま明石所は近きうらつゞきなみより波にうつる月影

⑧　萬眞

憎むべき言の葉ぐさとしりながら仇にも迷ふ我心かな

語注　○万真＝未詳。

⑨　早樹

世を捨てゝ山にいるべき我身にも春は來にけり鶯の聲

此春はわきてうれしき百千鳥我わか返れと聲の聞ゆる

語注　○わか返れ＝若返れの意。

評釈　この二首は「随身巻子」四十二裏にもある。

⑩　丙寅人日。月池書齋席上　桃花生

春來纔七日　春来　纔かに七日

促レ我發二江城一　我を促し江城を発たしむ

城裏梅花在　城裏　梅花在り

征人多少情　征人　多少の情

語注　○丙寅人日＝慶応二年一月七日。○月池＝甫周の雅号。○桃花＝水品楽太郎のこと。

評釈　柳北は慶応元年十二月に横浜に赴任しているが、正月には江戸に戻っていたと見える。⑩⑪⑫の三首の五言絶句は、慶応二年一月七日に甫周邸にて、横浜の太田陣営に駐屯する柳北に対し、送別の宴を催した折の作である。「随身巻子」四十裏から四十一表に同じ三首を記載す。但し、作者名は無い。⑩は楽太郎が柳北に詠んだ送別の詩。

⑪　和桃花生韻　桃花生の韻に和す　香雪山人

梅花盛開日　梅花　盛んに開く日

征馬出二江城一　征馬　江城を出づ

春風無レ限好　春風　限り無く好し

只是奈二離情一　只だ是れ離情を奈(いか)んせん

語注　○香雪山人＝今泉氏は柳北とする（前掲書三六〇頁）。

評釈　楽太郎の送別詩に和しているので、作者は柳北である。

⑫　重次前韻　　桃花生

梅前萬觴酒　　梅前　万觴の酒
不レ足レ破二愁城一　　愁城を破るに足らず
黙與二花神一別　　黙して花神と別なれば
無レ言却有レ情　　言無くして却つて情有り

語注　○万觴酒＝酒をあびるほど飲んでも。○愁城＝消しがたい愁いの比喩。

評釈　「随身巻子」四十一表では⑫は「送誰園先生之金川（誰園先生の金川に之くを送る）」という詞書になっている。さらに「随身巻子」三十九裏には次の七言絶句がある。

春來三過品川湾　　春来　三たび過ぐ品川湾
滿眼雲烟不二見レ山一　　満眼の雲烟　山を見ず
可レ憐香閨別離涙　　憐れむべし　香閨　別離の涙

化爲二海驛雨濟濟一　　化して海駅の雨濟濟たるに為る
右恠翁作　　右恠翁作

恠翁は柳北のこと。恠は怪の俗字。顔が長いのでおばけの仇名があった。香閨は女の部屋。濟濟は雨の降るさま、涙の流れるさま。「春来三たび過ぐ品川湾」で、柳北が江戸と横浜を頻繁に往復していることが分る。

⑬　歸路舟中

淡月蒼煙泝二州一　　淡月　蒼煙　二州を泝る
滿江春水暮燈流　　満江の春水　暮燈流る
漁郎休レ訝香風動　　漁郎　訝るを休めよ　香風の動くを
一朶梅花載在レ舟　　一朶の梅花　載せて船に在り

語注　○二州＝両国。○訝る＝あやしむ。驚く。○一朶＝一枝。

評釈　作者名はないが、柳北ではないか。送別の会の帰りかもしれない。一幅の文人画のような風景を背景に、詩にゆとりと落ち着きがある。

⑭　無題

風雨驛樓夢不レ安　　風雨　駅楼　夢　安からず
衾裯如レ水枕燈殘　　衾裯（きんちゅう）は水の如く　枕燈は残る
關レ心宅畔孤梅樹　　心に関るは　宅畔の孤梅樹
芳蕋堪二無此曉寒一　　芳蕋（ほうずい）　此の暁寒に堪ふるや無（いな）や

語注　○衾裯＝掛け布団と夜着。○宅畔＝家のそば。○孤梅樹＝一本の梅の木。○芳蕋＝香しい梅の蕾。

評釈　作者名はないが、駅楼から横浜の任地に赴く途中の柳北の作ではないか。風雨の音でふと目覚めると、宿の布団は冷たいし、行燈の灯も消えかかっている。寒い。邸の梅の蕾はこの寒さに堪えられるであろうか。孤梅樹は家に残してきた側室のお蝶を象徴しているようである。

⑮　なに事とはしらねど　　早　樹

もゝ千鳥さへづる春の初より戀てふ二字は深く成ぬる

語注　○もゝ千鳥＝百千鳥。『古今集』春歌上「ももちどりさへづる春は物ごとにあらたなれども我ぞふりゆく」を踏まえる。

⑯　夜ふけて人のもとより呼びにおこせければ　　誰　園

ゆくもうしゆかぬもつらし朧夜の霞にまよふ我心かな

⑰　その家の主に代りてかへし　　よしまろ

とへかしな霞に空は曇るともたゞ我宿の月のさかりを

語注　○とへかしな＝訪れてほしいものです。「かし」は念押しの間投助詞。

評釈　よしまろが春三であるから、その家の主は、甫周であろう。

⑱　金盞歌　　河氏女禽兒譯

於母布於加多爾佐伽荳伎左之氐。人目萬藝良須伎都禰拳。婉而姣恰如二叔孫大夫之爲一人

原作。金盞無レ端留在レ手。欲レ傳却避意中人。
臥孟先生評。諸子譯二此詩一。皆史二於拘一。唯禽兒此譯出二人意表一。且不レ失二香奩之体一。妙不レ可レ言。
誰園先生評。何似二羅浮之語一

金盞の歌　　河氏の女、禽児訳

おもふおかたにさかずきさして人目まぎらすきつねけん。婉にして姣、恰も叔孫大夫の人と為りの如し。

原作。金盞　端無くも留めて手に在り。伝へんと欲すれども却って避く　意中の人を。

臥孟先生の評。諸氏此の詩を訳す。皆、拘はるに史なり。唯だ禽児の此の訳人の意表を出ず。且つ香奩の体を失はず。妙なること言ふべからず。

誰園先生の評。何ぞ羅浮の語に似たる。

語注　○金盞＝金の杯。○河氏女禽児訳＝河氏は浅草橋場の酒楼川口屋で、河喉と漢語表現されることが多い。禽児は芸妓お鳥のことであろう。○於母布於加多、以下はお鳥の都々逸を万葉仮名に仕立てたもの。あの人にそれとなくお酒をついであげているけれど、目立つのはイヤだから、狐拳でごまかしている。○艶而姣＝艶めかしく美しい。○叔孫大夫＝春三の号に、「淑麿」「滝孫」があるので、淑と通音する叔と、滝孫の孫を合わせたのではないか。開成所教授の職にあったから大夫である。春三は茶屋遊びにも通じ、艶っぽい俗謡を作る名手でもあった。○原作＝お鳥の訳した都々逸の原作の一聯。金の杯が私の手に回ってきたが、どういうわけかあの人にすんなりついであげられないもどかしさ。○臥孟先生＝春三。○皆史於拘＝史には、見かけだけが良く、実質がともなわないの意がある。拘はこだわるの意か。○香奩之体＝香奩体。香奩は女性の化粧道具を入れる箱。香奩体は女性の艶情、媚態、閨怨などを歌う詩のスタイル。○羅浮＝中国・広州にある山の名。山麓は梅の名所として知られる。隋の趙師雄がここで、夢に梅の精である美人に会ったという。ここでは、芸妓のお梅を指すか。

評釈　原作の一聯を川口屋のお鳥が都々逸風に訳したという見立てであるが、それをさらに万葉仮名で表記したという、手の込んだ作に仕立てたのは春三であろう。小文字の婉而姣以下の評は柳北のもの。婉も姣も女の美しさをいう。

ところで「随身巻子」三十一裏に次の記載がある。

廿四日　和泉ニて箕秋にあふ　金盞無端留在手
　　欲傳却避意中人
　　おもふおかたニ盃さして人目まぎらす狐けん

とあって、和泉は和泉橋近くの柳北邸のこと、箕秋は箕作秋坪のことであるが、いつもの会合があったようで、⑱には柳北と春三の評があり、甫周が「随身巻子」に記録していることで、一聯の原作は箕作秋坪であろう。お鳥も陪席していて、都々逸にしたのは、実際にお鳥であったのかもしれない。いずれにしても、仲間内の呼吸の

合った応酬で、何とも洒落た遊び方の極意を見る思いである。

⑲　人のもとにて酒のみけるをり口ずさみに　きのよしまろ

あひみればこひずしもあらずしかりとて
つまさだまれる子をいかにせん

語注　○こひずしもあらず＝恋をしないわけではない。

⑳　かへし　さだむる子大野

うき事も此道よりと思ふにぞ數ならね身は獨り過なん

語注　○大野＝未詳。

㉑　萬子臥レ病。有レ約不レ至。寄レ書招レ之。答以二竹枝一首一。

万子病に臥す。約有れども至らず。書を寄せ之を招く。答ふるに竹枝一首を以てす。

思ふおかたのおまねきうけてゆかれぬ心御すいもじ

語注　○万子＝未詳。○御すいもじ＝ご推察。

評釈　㉑から㉔までは、万子と禽児との応酬であるが、万子の名をかたった洋学者仲間の誰かと、禽児とのやりとりであろう。

㉒　和萬子竹枝詞之韻　禽　児

万子の竹枝詞の韻に和す

おもふおかたの御出が無くてうかぬ心を御推もじ

語注　○禽児＝芸妓のお鳥。

㉓　再答　萬　子

うかぬ心を浮かしよとならば明後日をまたず今おいで

評釈　「今おいで」という言い方は、そんなに逢いたいのなら今すぐこっちへ来ればいいじゃないか、と男から女への呼びかけに思える。

㉔　又

あら小田を返す類ひと思へども猶憎からぬ言の葉草か

語注　○あら小田＝未開墾の田。○返す＝田を返すと歌を返すを掛ける。

㉕　失題　　滹孫生

孤舟曉過茗溪東　　孤舟　暁に過ぐ　茗渓の東
烟罩垂楊雨色濛　　烟　垂楊を罩めて　雨色濛たり
這裏誰知斷腸客　　這裏（しやり）　誰か知る　断腸の客
相思偏在不言中　　相思　偏に不言中に在り
或人譯之曰　　ある人これを訳して曰ふ

蔭じや日毎にお前のうはさ逢へばはなさうこともなし

語注　○滹孫生＝春三のこと。○罩＝込める。入れ包む。『伊都満底草』は「單」としているが。「随身巻子」には「罩」と筆写されており、誤植であろう。○這裏＝このあたり。

評釈　「随身巻子」四十四表に同じ詩があるが、作者名は臥孟（春三）となっている。したがって滹孫は春三である。茗渓の東は今のお茶の水の東で神田川沿いの柳橋をさす。柳橋で遊んだ客が家に帰るところか。しとしと雨の霧につつまれて柳の枝が垂れ下がっている。断腸は後朝の別れの余韻であろう。逢ってもあまり言葉を交わさなかったのか。でも、想いは互いに通じあっている。「ある人」は春三本人ではないか。

㉖　うれしきことのありしは。はたうきことの種にあらなんなど。思ひつゞけてかくよめりける　　難波津のあるじ

かり枕結びし露の言の葉は夢なりけりと人に語らむ

孤山先生頃日得詩數篇。載隣香餘趣。故不贅於此

孤山先生、頃日詩数篇を得たり。隣香余趣に載す。故に此に贅せず。

語注　○難波津のあるじ＝柳北のこと。○かり枕＝仮寝。仮寝の露は、旅先で野宿などをする所におく露。○孤山先生＝柳北本人ではないか。○隣香余趣＝詩集の題名か。○贅＝余分なものを付け加えること。

㉗　臥孟道人（道非孔孟之道　所謂新道之道）引古楽府曰

臥孟道人（道は孔孟の道に非ず　所謂、新道の道なり）古楽府を引て曰ふ

思ひくづをれうたゝねすればやはりつれないぬしの夢

臥孟書中論佳人某曰。人若指彼佳人曰不佳。吾將絶交於某人。

孤山生評曰。善哉臥孟之言。可以爲我社不朽之典刑。

臥孟書中に佳人某を論じて曰ふ。人、若し彼の佳人を指して佳ならずと曰はば、我、将に某人と絶交せんとす。

孤山生評して曰ふ、善きかな、臥孟の言、以て我が社不朽の典刑と為すべし。

語注　○古楽府＝古詩のスタイルで擬古楽府という。この場合は、古謡の意であろう。○典刑＝昔からの掟。

評釈　春三の擬名「臥孟道人」を、自ら孔孟の道を究めた道人ではなく、花街に通じた道人であるとし、古謡に見立てた自作の都々逸で、情人を想う美人の気持を歌い、その女の容貌を謗る野郎がいたら、ただではすまないぞと息まく。それを孤山（柳北であろう）が、春三の心意気を持ち上げて、仲間内の結束の証しとする。

㉘　題しらず　　よみ人も

立並ぶ色香ならねど桃の花さすが彌生の春は見えけり

㉙　代校書某和茗溪曉發詩

校書某に代りて、茗渓暁発詩に和す　　愛篁生

わたしやこゝまでこがれて來たが
ぬしはすましてお茶の水

語注　○校書＝芸妓の唐名。○茗渓暁発詩＝㉕の春三作の詩。○愛篁生＝甫周。○お茶の水＝茶にするにかける。人を利用してあとはうち捨てて放っておく。

評釈　㉕の春三の詩意に、甫周が「本気か？」と揶揄している。「女の気持も知らないで、色男ぶっているわりには、冷たいのだから」と。

㉚　某日與愛篁遁窟恭屛諸子飲。阿雛文君在座。酒酣小濱偶至。賦以記喜。

藐山女僊賜號　眞臥孟

某日、愛篁、遁窟、恭屛諸子と飲す。阿雛、文君座に在り。酒酣にして小浜偶（たまたま）至る。賦して以て喜びを記す。

藐山女僊号を賜ふ　真臥孟

拂レ檻春風簷柳斜　　檻を払ふ春風　簷柳斜めなり
玉盃頻酌興倍加　　玉盃頻に酌めば　興倍加ふ
群賢咸至無二遺憾一　　群賢咸至り　遺憾無し
綺席新添一朶花　　綺席新たに添ふ　一朶の花

語注　○遁甯・恭屏＝愛篁が甫周で、作者が真臥孟（春三）であるから、恭屏は屏の内で恭順しているの意で柳北、遁甯は楽太郎あたりか。○阿雛・文君・小濱＝芸妓のお雛とお文とお浜。○真臥孟＝春三のこと。○藐山女僊＝藐山は藐姑射之山で、不老不死の仙人が住んでいると伝えられるやま。女僊は女の仙人。陪席した芸妓の内の誰かであろう。○群賢＝洋学者仲間。○綺席＝綺麗な芸妓が並んでいる宴席。○一朶花＝一枝の花。ここでは後から来た芸妓の小浜を指す。

㉛　友人のもとへ消息して別荘を借りに遣しけるとき偶然に燗公の神詠あり如左

押しゆかば座敷を明けよ梅の花
あるじ留守とて門な鎖しそ

語注　○友人＝洋学者仲間で別荘を持っているのは、柳北だけであろう。側室お蝶を囲った有待荘である。○燗公の神詠＝燗公は菅公で、菅原道真の「こちふかば」の歌のパロディーである。燗公は「かん」の音が通じるので、神田孝平のことか。○神詠＝見事な出来の歌。

㉜　臥孟先生有レ詩見レ示。謹歩二瑤礎一

臥孟先生、詩有りて示さる。謹んで瑤礎を歩む。

夜窓何影寫二横斜一　　夜窓　何の影ぞ　横斜を写す
一夢醒來春意加　　一夢醒め来れば　春意加はる
眞個多情君莫レ笑　　真個　多情　君笑ふこと莫れ
劉郎今日醉二桃花一　　劉郎　今日　桃花に醉ふを

語注　○瑤礎＝未詳。○横斜＝梅の枝の影か。○真個＝真箇。まことに。○劉郎＝唐の劉禹錫の「玄都観」の故事から、劉郎と桃花は縁語。

㉝　無題　　孫

一夜夢魂游二漢京一　　一夜　夢魂　漢京に游ぶ
滿城花色亦關レ情　　滿城の花色　亦た情に関る
隴頭鸚鵡能言語　　隴頭の鸚鵡　言語を能くするも

不」及新鶯只一聲　　及ばず　新鶯の只だ一声に

うぐひすの聲し絶ずば橋の名の柳の色も常磐ならまし

語注　○孫＝滬孫で春三であろう。○漢京＝中国の都。○隴頭＝隴山のほとり。隴山は陝西・甘粛両省の境にある山。隴客は鸚鵡の異称であるが、隴山に多く産するところから言われる。物真似のうまい隴山の鸚鵡も、鶯の初音の一声にはかなうまいの意。歌の意は、鶯の鳴音がいつも聞えていたら、柳橋の柳の葉の色も変らないのに。

㉞　誰園主人のもとへ消息のはしに（有註略之）　　よしまろ

咲匂ふ盛の色はまだみねど花の名をこそ聞まほしけれ

評釈　あの妓はまだ蕾のままで、これからが楽しみなのだが、せめて名前だけでも聞いておきたいものだ。

㉟　茗溪曉發の詩を消息のついでに見せに遣しければ、其返事の中に　　茗溪主人

舟子等がいとふ心も白浪にたゞとり楫の思ひわくらん

語注　○茗溪主人＝柳北か甫周であろう。○白浪＝波頭の白浪と「知らぬ」を掛ける。○とり楫＝船首を左に回すこと。それに芸妓のお鳥を掛ける。

評釈　帰り船の船頭がいやがるのも知らぬげに、舟を廻して戻りたいということでしょう。

㊱　春雨のつれ〴〵其夜のことなど思ひつゞけて心も身にそはずなどかきて

宿りせしとりの初音に春しりて花になりぬる我心かな

評釈　㉕㉙㉟と「茗溪曉発詩」に関連する歌が続くが、㊱もその延長にある歌で、作者は春三であろう。

㊲　ある樓上にて　　愛　篁

あなかしこ柳のもとの女郎花われ尋ね來と人に語るな

語注　○愛篁＝甫周。

評釈　「随身巻子」四十三表に次のようにある。

「舟中偶作　讀人しらず」として、「きく人のなしとおもへば中々にすゞろごとさへいはれざりけり」とあって、次に「青天白日　仰天不愧、意なるべし　？　」となっている。「舟中偶作」の歌は、「聴いてくれる人がいるからこそ、とりとめのない話も出来ようものを」の意で、「何もやましいことはなく、天に誓って恥じることはない、ということか」と評している。つづいて四十三裏に㊲と同じ詩が記載され、「青天白日　仰天不惚ト相返？」となっている。なお、四十四表には、「茗渓暁発詩」が記載されているので、㊲の歌も「茗渓暁発詩」に関連しているように見える。

㊳　春日寄二誰園主人一　　寒橋醉漁

一自二東風吹一暖來一　　一たび東風の暖を吹き来るより
山々雪解百花開　　山々　雪解け　百花開く
春光到底落二誰手一　　春光　到底　誰が手にか落つる
昨日桃花今日梅　　昨日の桃花　今日の梅

語注　○寒橋醉漁＝甫周のこと。甫周邸は築地の明石橋（俗称寒さ橋）の近くにあった。○到底＝つまるところ。結局。○誰手＝誰の手に落ちるか、であるが、誰園の手に落ちるに掛かる。

評釈　これも柳北の任官を寿ぐ詩であろう。ようやく柳北にも春が来たことを祝っている。

㊴　夜起　　滝孫

醒來風雨凄　　醒め来れば　風雨凄し
醉臥群姫裏　　醉ひて臥す　群姫の裏
酒渇漫思二茶一　　酒渇して　漫に茶を思ふ
禽兒呼不一起　　禽児　呼べども起きず

孤山生評。酒渇所二思不一啻茶一。合原氏有一言曰。ドンナモノデアリマショーカ。其此之謂歟。

孤山生の評。酒渇して思ふ所、啻に茶のみにあらず。合原氏に言有りて曰く、どんなものでありましょうか。其れ此の謂か。

語注　○滝孫＝春三。○群姫＝芸妓たち。○酒渇＝酒を飲んで喉が渇くこと。○禽児＝芸妓のお鳥。○孤山生＝柳北。○啻＝ただ。○合原氏＝未詳。

評釈　風雨の音でふと目ざめると、酔ったまま芸妓たちと雑魚寝をしていたようだ。喉が渇いて茶が欲しいが、お鳥を呼んでも起きてくれない。評は、本当に茶だけが欲しかったのかしら。これに合原

氏が、さーね？　という。そうとでも言うしかないか。

⑩　題臥孟仙笞レ龜圖

臥孟仙、亀を笞うつ図に題す

毎兆生

老龜一個。夭桃一枝。遷レ怒再過。非レ酔非レ痴。喝。爾本來有二一物一。勿レ折勿レ笞。

老亀が一個。夭桃が一枝。怒りを遷し再び過ぎる。酔ふに非ず、痴に非ず。喝。爾、本来一物有り。折る勿れ、笞うつ勿れ。

語注　○毎兆生＝未詳。○遷怒＝やつあたり。

評釈　難解である。

⑪　ある人の許へ

ある人

水はどうやら澄んでも來たが月の曇りが氣にかゝる

⑫　返し

ある人

月は曇れど晴れる夜あるが水は流れてとめどなし

評釈　⑪⑫の作者は未詳。

⑬　偶吟

可愛叟

白雲三歳護閑人　　白雲　三歳　閑人を護り
夜鶴曉猿伴此身　　夜鶴　暁猿　此の身に伴ふ
今日偶然入城市　　今日　偶然　城市に入るに
風塵猶似往年春　　風塵　猶似たり　往年の春

玉巵紅袖翠簾船　　玉巵　紅袖　翠簾の船
豪興當年冠墨川　　豪興　当年　墨川に冠たり
今日蕭郎有餘憾　　今日　蕭郎　余憾有り
黄昏馬首脊レ花旋　　黄昏　馬首　花に背きて旋らす

世上之眞無レ不レ僞　　世上の真　偽ならざるは無し
人間之是亦多非　　人間の是も　亦た多くは非
古今誰悟莊生訣　　古今　誰か悟らん　莊生の訣
滿地春風胡蝶飛　　滿地　春風　胡蝶飛ぶ

語注　○白雲三歳＝三年の月日が流れたこと。○閑人＝柳北の屏居の状態。○護＝みまもる。○夜鶴暁猿伴此身＝夜中の鶴の鳴き声と

明け方の猿の啼き声が聞えるような人里離れた境遇。南斉の孔稚珪の「北山移文」（『文選』）の「董張空兮夜鶴怨　山人去兮暁猿驚」に拠る。○入城市＝屏居が解けたこと。○風塵＝人の世。世間。○玉巵＝玉でつくった杯。○紅袖＝美人。○当年＝往年。○余憾＝意に満たない、しっくりこない状態。○世上の真＝世間で通用している真実。○人間の是＝世間で通用している正義。○荘生＝荘子。○訣＝奥義。

評釈　この三首は柳北が歩兵頭並に任ぜられた心境を歌ったものである。第一首は屏居を解かれて江戸の街に出てみると、世間は三年前と変わらず、昔のままの春の季節であった。第二首は屏居の前は、隅田川に船を浮べ、美人を侍らして豪勢な遊びをしたものだが、今は、遊びにうつつを抜かしている場合ではない。花見もせずに、任地へ向うのだ。第三首は世間でいうところの真実とか正義には、胡散臭いところがある。荘子の自由闊達な世界観を手にできればよいのだが。春風に飛び舞う胡蝶のように。柳北は儒者という文人の立場から、軍務に携わるという武人の立場になって、いわば人生の大転換に遭遇することになるのだが、この三首には、柳北の内面の揺れ動きが、率直に表出されているように思える。時に柳北三十歳。慶応二年十二月に横浜に赴任するものの、約二年半後の慶応四年四月には、江戸城開城にともない隠棲に入ることになるのである。

㊹　Lochは流れずのかへ歌

竹は靡かず勢婆はきかずたのむBirdはふた心

語注　○Loch＝ロッホ。Lochはスコットランド語で「湖」、「細長い入江」の意。○勢姿＝未詳。

評釈　この歌の本歌と思われる作が、甫周の「雲にかけはし」四表（今泉・前掲書三〇六頁）にある。

ろふはすゝまずセールハきかず頼む蒸気は片まわり

「ろふ」は「艪」で、「セール」は「帆」、「片まわり」は外輪船の片方しか回らないこと。すなわち思うように船が操れないように、女の扱いは難しい、ということであろう。『桂川の人々』最終巻三〇七頁に、今泉氏は㊹の都々逸を春三の作と推定して、次のようにいう。「Loch（ロッホ）は英語の入江。勢婆は未考。Birdは鳥。竹は甫周の好きな女、鳥は、柳北の愛人」。

㊺　題しらず

春　影

唐大和花の二くさ同じくは庭にうつして見るよしも哉

⑯　女にかはりて竹取の翁へ　　同じ人

年ふれど訪ぬきみかな三輪の山杉たつ門に心とむらむ

語注　○竹取の翁＝甫周。○三輪の山杉たつ門＝三輪神社は杉の神木が知られる。

評釈　本歌は「我が庵は三輪の山本恋しくばとぶらひきませ杉立てる門」（『古今集』九八二）。女の代りとあるから、女の名が詠み込まれているとすると、丸印がつけられた「お門」であるか。

⑰　無題　　樂窩生

風意吹レ春是我家　　風意　春を吹く　是れ我が家
鬢雲横レ枕玉釵斜　　鬢雲　枕に横たはりて　玉釵斜めなり
諸君休レ道樊川老　　諸君　道ふを休めよ　樊川老
折得楊州第一花　　折り得たり　楊州　第一花

一枕華胥醒轉疑　　一枕の華胥　醒むれば轉（うた）た疑ふ
夢耶非レ夢兩心知　　夢か夢に非ざるか　両心知る

朝來倚レ柱尋二情趣一　　朝来　柱に倚りて　情趣を尋ぬれば
黄鳥來啼楊柳枝　　黄鳥　来り啼く　楊柳枝

語注　○楽窩生＝窩には別荘の意あり。となると、側室お蝶を住まわしている「有待荘」の持主、柳北であろう。○風意＝風のしわざ。○鬢雲＝黒く艶やかな髪。○樊川＝晩唐の詩人杜牧のこと。○折得楊州第一花＝楊州は「揚州」の意。杜牧が揚州第一の美女を手に入れたことをいう。柳北は自らを杜牧に見立て、柳橋を揚州に見立てている。○一枕＝一眠りすること。○華胥＝理想郷。○両心＝二様の気持。○黄鳥＝鶯。

評釈　二首とも、夢に仮託して有待荘の楽しみをほのめかしている。春風が吹きはじめた自分の家に、女が寝姿を見せている。杜牧になぞらえれば、柳北はお鳥という柳橋一の美女を手に入れたのである。第二首は、桃源郷のようなところにいたような夢をみた。朝になって柱にもたれつつ、春先の気分に浸っていたら、鶯が柳の枝で一声鳴いたというところである。

⑱　題しらず　　よみ人も

しらざりきまだ下萌の若草にかくまで露の情けありとは

評釈　まだ一人前になっていない女なのだが、はやくも男女の機微にたけているようだ。

㊾

天地風流屬二阿誰一　天地の風流　阿誰に属す
一株楊柳占レ春時　一株の楊柳　春を占むるの時
佳人畢竟配二才子一　佳人　畢竟　才子に配す
笑殺世間輕薄兒　笑殺す　世間の軽薄児

夢魂一夜向二瑤臺一　夢魂　一夜　瑤台に向ふ
月下神姫晤語來　月下　神姫　晤語し来たる
誰識仙鄉無レ限好　誰か識らん　仙境の限り無く好きを
玉扃未二肯爲一レ人開一　玉扃　未だ肯て人の為に開かず

梅嶺桃溪春已老　梅嶺　桃溪　春已に老ひ
高人無二處遣一閑情一　高人　処として閑情を遣ること無し
無レ端獨倚二南窓一臥　端無くも独り南窓に倚りて臥せば
簾外幽禽有二好聲一　簾外に幽禽の好声有り

語注　○配＝つれそう。そわせる。○笑殺＝笑って相手にしない。○瑤台＝仙人のいるところ。月の異称。○晤語＝互いにうちとけて語る。○玉扃＝玉で飾った扉。○遣＝憂さを晴らす。

評釈　無題、無署名の三首であるが、「伊都満底草」の大尾を飾るのは、柳北の作であろう。この三首において、柳北は風流韻事のあるべき理想の世界を、詩に託した。一首目。風流の世界は、誰のものなのであろう。春爛漫のとき、一本の柳の樹があって、枝が風になびいているとしたら、佳人才子の組合わせと来なくては、画にならないであろう。そこらの兄さんでは役不足というものである。二首目。夢の中で月を眺めていると、女神が来てくれてやさしく言葉をかけてくれる。今、わたしは憧れの仙境に身をおいているのだ。でも、そこまでで、宮殿の扉はついに開けられることはない。三首目。梅の花も、桃の花も　散ってしまって春も終り。さすがに隠遁の風流人もなすすべがなく、窓によりかかってうつらうつらしていると、どこからか、美しい鳥の鳴き声が聞えてくる。

おわりに

洋学者仲間との風流韻事から生れたこの詩文集は、会合ごとに覚書きとして記録されたままの状態であったものであるが、多少なりとも校訂を加え、編集されて遺されていたものかは、原本が失われている現在、確定することが出来ない。底本として使用した『柳北全集』の編集にあたって、編者の岸上質軒がどの程度の校訂をなしたのか、柳北没後十三年の編集であれば、作者に問い質すこともな

らず、唯一、当時は原本が存在していたことで、編者としての責務を果たしたものと信じるしかない。いずれにしても、慶応元年の一月からはじまる詩文の記載は、慶応二年一月の柳北の横浜赴任をもって終了する。任地にあっては柳北邸での会合そのものが出来なくなるからである。となると、㊾の三首の詩は、横浜へ出発する直前に作詩されたのではないかと推測される。